
斜め35度右後方からその声はした。

清水澄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

斜め35度右後方からその声はした。

【Nコード】

N9803Z

【作者名】

清水澄

【あらすじ】

過去の恋人の事が忘れられない主人公、そんな彼女にアプローチをするものの彼も彼女の忘れられない過去に振り回されて・・・惹かれあいながらも、二人の心はすれ違っていく・・・。

R15は保険、コメデイタッチで時々シリアス。そしてちよっぴり切ない恋愛ものを目指しています。

最後は、ハッピーエンドの予定・・・です。

はじまり…

斜め35度右後方からその声はした……。

おれ……お前のことがすきだ……。

モニターの音が響く夜のナースステーション。他の夜勤者はただいま巡視中だ。

私は、せん妄のおばあちゃんの見張りをするために一人詰め所に残っていた、

「ちーちゃん、たいくつですか？」

89歳のおばあちゃんは軽い肺炎と脱水でせん妄状態にあり夜になると家と病院の区別がつかなくなり、同室者の迷惑になるために深夜まで詰め所で過ごすことが多かった。

「他の人は巡視？」

声をかけられて目をやると、一人の医師がドーナツの箱を手に詰め所に入ってきて来るところだった。

「あれ？今日から夏休みじゃなかったけ？」

「気になる人がいたからちよつと顔を出したんだよ」

同期入職の彼は、ローテートで外の病院に出ていたのを先月帰ってきたばかり、頭もよく人柄もそれなりで、見かけもそれなり、しかも独身の31歳 若い看護婦の人気をさらっている。

なのになぜか、浮いたうわさのひとつもない。詰め所に差し入れを持ってくる暇があつたら、彼女でも作ればいいのに……、などというらないおせっかいを考えつつ、もってきてくれた差し入れをありがたく受け取り思った事を口に出してしまふ。

「夏休みだというのに、デートする相手もないなんてかわいそうにね。」

「……これからつくるからいいんだよ。」

そっぽを向きながらやや不機嫌に返事をする彼に苦笑を交えながら言った。

「まあ、おかげで差しいれただいたし。ありがとうございました。」

「……現金だな、あいかわらず……」

円いテーブルの向かい側に腰掛けながら、電子カルテを立ち上げるしぐさをなんとなく見ていた。気になる人って、そんな重症の患者なんて今いたっけ？

考えていると、彼がカルテの画面を見ながら言った。

「今日は、定時で終わるの？」

思わず、ききかえした。

「?……なんで……?」

「終わったらラーメン食べに行かないか？」

「……いいけれど。今日の夜勤者に……誰か誘いたい子がいるの？」

私の問いかけにカルテに視線を落としたままで、軽く眉をしかめた後低い声で返事が返ってきた。

「お前一人なら、おごるぞ？」

わあ！ラッキー！！ 給料日前で今月は特に厳しかった。とつても助かる。

「いくいく!!どこまでも!!なんなら飲み付き合ってもいいよ!……て、どうしたの?なんか悩み事?相談? よし!お姉さんが聞いてあげよう!!」

お前のほうが年下だろう……。と苦笑いしながら彼は返事をする。そういえばローテート前はよく飲みいったよね。と、私もご機嫌に返事を返した。

……と、しょうもない会話で、うつかり目を話した際に、行動

監視中のおばあちゃんは外にでようとしていた。

「あー ちーちゃんここに居てくれるかな」

立ち上がるうとしてしている患者さんの、車椅子の前にひざまずき、したから顔を覗き込んで視線を合わせる。

「おなかすいたの？おかしもってこようか？それともお茶飲む？そういうえば、日置先生にもらったドーナツがあるからこっさりいただこうか？」

にっこり微笑みを返してくれるおばーちゃん笑顔に、悩殺されながら、お茶とどーなつを取りに行こうと立ち上がるうとしたそのとき……。

「おまえのことがすきだ……。」

その声はした……。斜め35度右後方から……。

はじまり その2

「……………!?!……………」

……………なんか聞こえた?

……………いやいや幻聴?

……………空耳?

……………あつ! わかった! ちーちゃんに言ったのね。

すこし、不安におののきつつ声の主を首を回して、ゆっくりと見上げる……………。

奴は、少しの動揺も見せず、クールな笑顔で私の耳元でささやく。「放射線科側の出口の駐車場に車を止めている、ラーメン食いに行くよな? 逃げるなよ?」

啞然とする私からすばやく離れた彼

は、巡視を終えてドアから入ってきたスタッフに、差し入れ持ってきた、とドーナツの箱を指差して笑顔で去っていった。

……………ナニガオコツタンダ……………。

時刻は、午前1時。

私は速攻で申し送りを済まし、他のスタッフに挨拶をして、更衣室で急いで着替えた。

もちろん待ち合わせの場所など目指すわけもなく、指定された駐車場から一番遠い出口を目指して走った。

パートナー的な存在が不必要だと思っているわけではない、独身主義でもないが、気持ちが付いていかず、必要以上に親しくなるうとする相手は遠ざけてきた、今もその主義は変えるつもりはない、彼がどういづつもりか今ひとつ図りかねるが、危ない橋は渡らないに限る。

今はとりあえず逃げてなかったことにしてしまおう。
長い廊下を抜けて、ほっと一息ついて夜間ロックのかかっているドアにカードキーを通し外に出た、

「よしよし．．人影はない、そつと辺りを見回しつつ、タクシーを拾うために構内をでて大どろりに出ようと歩み始めたそのとき、後ろから腕をつかまれ引き戻された。

「．．．．！！うえ！！！！」

「．．．．相変わらずだな．．その色気も何もない驚き方やめろつて．．．．」

「．．．．なんでここにいるの？」

聞き覚えのあるその声に私は目を瞑り、顔を上げられず首をすくめながら問うた。

「．．．．それは．．．．俺のせりふじゃないのかな？ 君こそなんで待ち合わせた駐車場から一番遠い出口から出ているのかな？」

「．．．．ちよつと、道をまちがえた．．．．かな？」

言い訳をしながら首を回してそつと薄目を開けると．．．そこには．．．

これ以上にないぐらい、素敵なお顔で微笑む彼がいた

「．．．．そして、明らかに怒っているであろう低い声で、彼はのたまわれた。

「．．．．ふん？．．．．この病院に6年も勤めて、寮にも入っていた君が、この病院の構内で迷うことがあるなんて．．．．ね？」
「．．．．誰か助けてください！！」

逃げ腰になっている私に 今度はこれ以上にないぐらい優しいまなざしを向けて彼は言った。

「貴重な時間を、こんなところでつかってもなあ．．．」

独り言を言いながら、私の手を引っ張りつつ、構内の道路に止めてある車に向かった。

あつ．．懐かしい、まだこの車に乗ってたんだ。

私の視線にきずいたのか、はにかみながら言った。

「ちよつと目的があつて、車にまで資金が回せなかつたんだ」

研修医のころにバイトに行くのに必要だからと、中古車ショップで購入していた軽自動車、冗談で私がグリーン色がいいといったらその色を購入していた。彼はそのころ同期の中では一番私と気があつて、頼れる仲間だつた。ローテーションで疎遠になつていたが、大事な友人の一人だという事に变りはない。

そんな、友情を育んだ思い出のページを振り返つて良い気分である私の気持ちを察知せず。早く乗れよ！と、助手席側のドアを開けて彼は私を車の中に押し込もうとする。

ちよつと、いたいって！！そうだ、こいつは、大事な友人でもあるが、思い込んだら自分の道を周りも見ずに突っ走る迷惑極まりない奴でもあつた。

無理やり押し込まれしぶしぶと助手席に座つた私のシートベルトを締めて内側からドアロックまでご丁寧にかけてドアを閉めて、奴は急いで運転席に乗り込んだ。

「……ずいぶん親切にしてくれるのね……。」

訝しげな私に、涼しい顔で彼はのたもつた。

「当たり前だろう。自分が乗り込んでいる隙に逃げられたら、目も当てられない。どんだけ、この日を待つていたと思うんだ！」

「……?! ドンだけ親切なんだろうと思つたのは、逃げるときに時間がかかるようにするためですか？」

私が啞然としている間に、車はすべりだした。

「……ねえ？」

前を向いたまま、奴は返した。

「? なに? 帰るつて話は聞かないぞ？」

「……いや? そんなに、一人でラーメン食べるのいやだったの?」

「……はあ!？」

目を見開いて、ゆっくりと奴はこちらを見た。

ちよつと！運転中！！危ないって！！

大きなため息をつきながら、前を見て、まったく・・・とか、どうしたらいいんだ・・・。

とか、ぶつぶつ言っている。

そんな彼を見ながら私は考えた。友情以上のものがあるんだろうか？いや、以前から彼は読めない奴だった。いろんな女性がモーションかけていたが、意に介さずわが道を行っていた人だ。私の勘違いの可能性も高い。そんな勘違いで、彼にいやな思いをさせるのもどうかと思う。

「おまえ、あしたから5連休だったよな？」

・・・よく知ってますね。まあ隠してたわけでないけれども。

返事をせずに黙っていると、

「貴重な、連休だよな？」

・・・？ 何が言いたいんだろう？と、思わず顔を見ると、

にっこりと、悪魔の微笑を浮かべる横顔が見えた。・・・なんかいやなよかんがする・・・。

「時間はあるし、ゆっくり飲もうか？」

・・・それは、友人としての、純粋なお誘いですよ・・・ね？

はじまり その3

気がつけば、なぜか彼のマンションにいた。夜中に安くでゆっくり飲めるところはここだろうと、押し切られた。

まあ、昔はよくよっぱらって皆と雑魚寝をしたから、初めてのお泊りではないけれど・・・、この状態で、この時間に、ここに来るのはかなり御遠慮したかった。

最近越してきたんだ・・・と言っつて案内してくれたそのマンションは、どう見ても、一人暮らし用でない。41dkで賃貸でなく、お買い上げだそうだ。

・・・そうですか、そりゃねあんたの給料だったら、買えるかもしれないわよね。

「・・・うわあ〜 きれい!!」
リビングから、ベランダが見える。眼下に広がる、見事な夜景!! 思わず声をあげた。

「たそがれ時は、もっと、すごいぞ。」

いつのまにか隣に来た彼が軽く肩を抱いてささやく。
・・・何するんだ?・・・と 軽くにらみつけると、何事もなかったようにキッチンに向かいワインとビールどちらがいい?と涼しい顔で微笑まれた。

ここで、この状態でお酒を飲むのもまずい気がしたので、ノンアルコールのものがいいと伝える。

「・・・酒飲みのお前が、ノンアルコール?・・・何か予防線張ってるのか?俺ってそんなに信用されてないか?」

ちよつと傷ついた顔をして返された。やっぱり私の思い過ごしかな?それになんか有るなら、今まで一緒にいた時間の中でとつくにどうにかなっていただろう。

「口ゼある?」

もちろん、・・・と返事が返り、冷えたワインと、グラスと、おつまみを持ってローテーブルの上に置いてくれた。座ると夜景が見えないのが残念だが、椅子より床に座るほうが私は好きだ。彼が持ってきた大きなクッションにもたれくつろいでしまった。

・・・自分が怖い・・・。
隣に座ったら殴ってやろうと身構えるワタクシの期待にはずれて、彼は向かいに腰をおろした。

「このまま、子供が出来てもすめるね。」

空腹にワインなんぞをいただいでちよっという気分になった私が軽く口をたいた。

「その前に、嫁もらわないとね」

あさつてのほうを向きながら、まじめに、彼が答える。

「誰かいるんじゃないの？こんな、妻帯者用のマンション購入して？結婚フラグたってるじゃない？」

「・・・いるよ、手に入れたい人が・・・。」

真剣な顔をして、こちらを見た。

「・・・いやな空気が流れる・・・。思わず身をすくめた。

「・・・だったら、私なんかにかまってないで、その人さそえば？」

彼に好きな人がいたとは、初めて知った。もっとも3年も離れていたのだからきずかなくても仕方がない。そうか、好きな子がいるのかと少しショックを受けて、それでも幸せになって欲しいと、彼を見た。

「どんな子なの？」

私の問いに、下を向いてため息をつきながら彼はいった、

「・・・多分、まったく相手にされてないんだ、俺のことを、かぼちゃか芋だと思ってる。男としても認識してないと断言できる

ね
」

・・・その話を聞いてかわいそうになった。もともと私は彼は嫌いではない、むしろ友人としてとても大事に思っている。幸せになつて欲しい。そんな友人が、好きな人に異性として感じられていないなんてとても同情をしてしまう。そりやどこかでストレス発散もしたくなる気持ちもわかる。だが、わたしでは愚痴の相手ぐらいにしかねれない・・・。

「私相手に、女性心理を聞きだそうと思つても無理だと思つよ？だつて私は世間一般とかけ離れてる自信があるもの。」

・・・ほんとにね、・・・と溜息交じりに彼はつぶやいた。

どっちにしても、ストレスは私に向けられても困る。発散の対象に私が選ばれていることは、ちよつと不服だが、わらをもつかむ心理はわからないでもない。

顔はそんなに悪くないと思う。なまじつか当たり障りのない性格をしているのも、問題なんだろうか？世の中マニアックな好みの人が多いからな？

いやいや、実は やさしいんではなく単なるヘタレだつてことに先に気づかれたとか？優柔不断で決めきれない性格してるしなあ・・・それに、みよくなどこ細かいし・・・思い当たりは、いろいろあるよね・・・。

男として認識されていないって・・・。なんか、モーションはかけているんだろうか？でもそんな相手だと手も出しにくいだろう。

それだったら、まだ男として嫌われたほうがましかもしれない、男と認識されるだけ・・・。男と認識されていない相手に自分の性別を認識させる方法なんてひとつしかないと思うが、この一見周りを見ずに突き進むところもあるが、肝心なところでへたれてしまうこの男にそれを実行する勇氣があるかどうか・・・。

などなど、彼が私の心の声に気づいたならば、本格的に傷つくだろうな・・・。

という内容のことを頭の中で考えつつ彼を見た。

わたしの、心の声に気づいたのか、彼はいった。

「・・・なんか、不本意なことを考えられてる気がする・・・。」

「いやいやいや、そんなことはないですよ？ほらほら、お姉さんが聞いてあげるから」

どンドン吐き出して頂戴よ。ほらここに座って!!」

「・・・だから、おまえは年下だろうって・・・。まあいいが、

・・・よこすわっていいのか？」

ぺしぺしと、自分のとなりをたたく私を見ながら彼はいった。

「向かい合わせだとお酌しにくいなと思っていたのよ。今日は一晩中付き合っただけようじゃないの!」

のそり、と彼は移動した。・・・?いやでもそんなに密着しなくても・・・。確かに隣には言ったけれど・・・。いやいやいや、思う人に思われず人肌恋しいのかな・・・と解釈してあえて異論を唱えなかった。

・・・はい、浅はかでした。・・・

殆んど私を抱きかかえるような形で密着した彼の行動をあえて無視し、わたしは温かい視線で相談に乗った。

「でも、聞けば聞くほど、困った人だね。」

本当に、聞けば聞くほどあきれてしまう。

その人と彼の関係は6年にも及ぶという。私もまったくきずかなかつた。私たちが友情を育んでいたときに、彼は彼女に対する恋心を育んでいたらしい。でもいつか誰だろう?上手に隠したものだ。

もつと早く相談してくれれば良いのに。本当に友達がいのない人だ。
「・・・まあ、おれも、冷却期間をおこうかと思って連絡取らなかった時期もあったんだ。

周りの女性に気のあるそぶり見せた時期もあったけれども、まったく反応なかったし」

まあ飲んで、・・・とグラスにワインを注ぐ、話を聞くうちに、口
ゼから始まり、白、赤、と3本目のフルボトルが空いた。

宅配の、ピザをつまみながら、私は涙目になっていった。

「しんちゃん。けなげだね。」

彼は、4本目出そうか？と聞いたが、私はかぶりを振った。

「いやいやいや、飲んでいる場合ではないって。どうにかして、その人を落とそうよ。でないと安心して飲んでられないよ!!」

こんだけ飲んで、飲んでる場合じゃないって・・・お前ドンだけ酔っ
てんの？・・・というため息交じりの声が聞こえた。

「どうしたら、俺の気持ちに気づいてくれる？」

覗き込むように、真剣な目で聞かれる。

うんうん、かわいそうにね、いい加減落としたいよね、切羽詰るよ
ね。と考えながら、彼の真剣な瞳をぼつと見ていた。

・・・あれ？・・・何か違和感を感じる・・・。酔った頭で、違和感の正体を考える。

「無理やり、押し倒そうかと思った時期もあったけれど、そんなこととして傷つけるのも違うと思って出来ない・・・」
そのせりふに思わず叫んだ。

「だめじゃない!!ヘタレ!!」

目を見開き、のけぞってる彼に私は言い放った!!少し・・・いや、かなり私は出来上がっていた・・・。

「6年だよ!!6年!!男として認識されていないんでしょう!!
!後はもう、自分が男だって、無理から認識させるしかないじゃな

い。すきだつて言つても聞いてないんでしょう!? 後は押し倒すしかないよ!!!」

啞然としてこちらを見る彼に私はここぞとばかりに続けた。

「いつもいつもそう!!! 一見わが道行つてる様に見えるくせに肝心なところで引いてしまう!!! だからいつつもリーチかかっているのに、大事なものに限つて手に入れ損ねてるんじゃないの!? そういうのなんていうか知ってる? ヘタレつて言うんだよ!!! 一度くらい勇気出してチャレンジしなよ!!!」

あたつて碎けてしまえ!!! と叫んだ私を見つめて、彼は碎けるは余計だ!と言つた。

そしてしばらく私を見つめていた。どのくらい時間がたったただだろう。。。見開いていた目を閉じて、こめかみに手を当てて、ため息をつきながら彼はいった。

「。。。そうだな、すきだつて伝えても幻聴扱いだもんな? あのシユチュエーションで、何でおれが ちーちゃんに、告白せんといかんのだ?」

横にいた彼との距離が縮まった。腕をつかまれた。

「。。。おまえ。。。これだけ言つても、自分に心当たりはないのか?」

酔いが一瞬でさめた。今私、何か非常にまずい事をいった気がする。。。

「。。。え〜つと? 宴もたけなわでございますが、わたくし、長居をしているみたいなので。。。そろそろおいとまを。。。」

立ち上がるうとした私を逃がすものかと片手が抱きしめ、あいた

片手がゆっくりと私の顎を捉える。

「5連休だったよな？奇遇だな？俺もだよ」

よかったですわね、と逃げようとしてみた。・・・でも逃げられない。やな汗がでる。

「お前言ったよな、後は押し倒すしかないって・・・。」

いやいやいや言ったよな、言わないよな・・・それはワタクシ除外ということをお願いしたいのですが・・・？。

「お前の助言どおり、肝心のところで引いてしまっへタレは卒業する事にするよ」

彼は私の頬をなでながら続けた。

「ゆっくりと、俺の性別が、雄だってこと認識してもらっよ・・・それから、いろいろ相談することもあるしな・・・。」

いやいやいやいや、ちよつとまっつてくださいな・・・。

「・・・自分の発言の責任は取れよな。」

奴の唇が、わたしのそれにゆっくりとかさなつた・・・。

はじまりのそのあと

なんで、私はここにいるんだろう・・・？

「おはよう」

啞然としている私の唇に、軽いキスを落としながら彼はさわやかに微笑んだ。

「トースト、チーズのせる？バターは？」

「・・・両方」

さわやかに微笑む、彼に答えながら、ベッドから降りた。なぜかパジャマは着ている、自分で着た覚えがないということは彼が着せたのだろう。腹立つぐらい、紳士だ・・・いやいや・・・紳士だったらあんな暴挙に出ないだろう！！

「・・・！！！ダメサレテハイケナイ！！！！・・・」

「・・・確かにあおつたのは私だが・・・」

「卵はどうする？目玉？スクランブル？」

「チーズオムレツ！！」

キッチンから、笑い声が聞こえる。むう・・・悔しい、嫌がらせになつてないようだ・・・。

着替えを探すが、見当たらない。たずねるのも悔しいので、パジャマのままキッチンに向かった。

「皿とつて」

言われて、差し出すと、湯気のたったきのこのチーズオムレツが乗った・・・。悔しいほんと嫌がらせをされてるのは私のようにだ・・・。

「・・・きのこすきだろう？」

じつと皿をにらみつける私に気づき、彼はいった。

「・・・嫌いじゃない・・・」

悔しいので、そう答えた・・・くそう・・・笑うな・・・なんでそんなにご機嫌なんだろう？

「パジャマ、だいが大きいな？今日必要なものを買に行こうか？
・・・はい？・・・」

「5日もあるしね、着替えもいるだろう？」

・・・もしもしい？・・・

「からだ、きつくはないか？初めてだったんだらう？」

・・・言うな・・・思い出させるな・・・あんなのためにとってたんじゃない・・・機会とその気になれなかつただけだ・・・。

「おれは、うれしかったよ、6年我慢した甲斐があった。」

涙目で、にらみつける私の目じりに彼はキスを落とす、・・・まあ怒るなって・・・俺の性別は認識してくれたよな？つてにが笑いしながらささやいた。

・・・いたしましたよ？このなんともいえない場所の違和感と、全身の筋肉痛が、その成果だと思えます・・・。

「食べないとさめるぞ」

悔しい、何でおなかはすくんだらう？

悔しい、何でこのきのこオムレツおいしいんだらう！！

ご飯を食べて、おいしい紅茶をいただいた。

「お腹膨れた？」

彼は、極上の微笑を私に向ける・・・やな予感・・・。

「・・・うん・・・」

「じゃあ、腹ごなしの運動しようか・・・？」

・・・！ちよつとまつたあ！ 出かけるって話は！？・・・
「だって、おまえ、まだ隙あらば俺から逃げようとおもってる・・・
よね？俺はお前の助言どおりヘタレは卒業したんだ、もう逃がさな
い」
後ずさりしようとしたが、後ろは壁だった。逃げ場をふさがれる。
私の願い、抵抗もむなしく・・・ベッドルームに引きずられていつ
た・・・。

別に、バージンにこだわっているわけではない。
結婚まで清い体で、というこだわりもない。
なのにこの年まで・・・とびっくりされるかもしれない。
そんな、機会がなかったといえばうそになる。

「ゼータイヤだ！行きません」
小さいころからずーっと、となりの12歳年上のいとこの優ちゃん
が大好きだった。

お医者になるんだと、医学生になったその人は本当に毎日忙しそう
だった。
中学に入り、優ちゃんも医師試験に合格し、お医者になったらます
ます忙しくなり、あえない日が続いた・・・。
あまりにもかまってくれない彼に少しすねて、何で美香と遊んでく
れないのと聞くと、自分は不器用だから人の倍努力しないとおいて
いかれるんだよ、と笑っていた。

親たちの間では、なんとなく結婚の約束が出来ていた。もちろん

それは、優ちゃんが親に頼んだことで私が中学2年生の夏に申し込まれた。ロリコンだね・・・とよく笑っていた、でも美香が高校に行つて変な奴に捕まったら、後悔しきれないから・・・。美香のバージンは僕のものだからね、と言つては私にどつかれて、それでも笑つてた。

高校2年の夏休み、珍しく休みが取れたので旅行しようと言われた。もちろん1泊で・・・。

当然のごとく、私は抵抗した。

「ゼツタイやだ」

「なんで？」

「恥ずかしいもん」

「なにが？別に良いじゃないか？いまさらだろう？」

でも恥ずかしいし、怖いものは怖い・・・。それでなくとも、美香のバージンは僕のものだと公言し、会うたびに押し倒されている、なにもないはずはない。

「美香が嫌がることはしないって、約束するから・・・ね？」

うう・・・負けそう・・・。いやいやいや

「でつでもまだ、約束の年じゃないじゃん」

「美香は僕のこと信じてないんだ・・・。」

いやいやいや・・・そういうことではなくって!!

「だめなものはだめっ!!」

何である時、一緒に行かなかつたんだろう・・・。

何で、もっと上手にもう少し待つててつていえなかつたんだろう。

あのときの、優ちゃんの傷ついた笑顔が忘れられない。

そして・・・その知らせは、学校に届いた。

「橘！お母さんが迎えに来てから、すぐ帰れ！」

私は、優ちゃんの申し出を喧嘩別れした形で断りクラブ活動に出ている、

母が何で？教室を出ると、真つ赤な目をしたお母さんが震える声で言った。

「美香、すぐ来て・・・」

・・・怪訝な顔で、母を見たが、詳しいことは教えてくれない。仕方がないのでついていった。いやな予感がした。

母は、私をタクシーに押し込んだ。何で自分で運転しないんだろう？1時間ほどして、救急病院にタクシーが着いた。

母は、痛いぐらいの強さで私の手をつかみ廊下をかけた、病院だし廊下は歩かないと・・・など、妙に覚めた目で私は母を見ていた。

外科病棟の病室の前で母が止まった。

「美香を連れてきました・・・」

ドアが開き、おじさんが出てきた・・・真つ赤な目をして・・・

その向こうに、おばさんが座り込んでいる、なっているようだ・・・

誰かが、ベッドに寝ているようだ、でも、器械と包帯だらけでよく見えない。

お父さんが、私を後ろから抱きしめてくれた。何か言っているがよく聞こえない・・・

優ちゃんがいない、いつも、美香が困ったときには必ず大丈夫だよっていつてくれるのに・・・どこにいるんだろう？おかしいな？こんなときほどそばにいてほしいのに、何してるんだろう？

お父さんが何か言ってる・・・？聞こえないって！！お母さんが何か言ってる？聞こえない！！ゆうちゃんはどこ？優ちゃんはどこ

？ねえ？誰か教えて？意地悪しないで？

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!! いやだ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

周りが真っ白になった。

無免許の飲酒運転だったらしい……。

横断歩道で信号待ちをしていた、優ちゃんに突っ込んで行ったと聞いた……。

何にも悪くないのに……。

お医者さんになりたてのとき、自分の持った患者さんのおばあちゃんに、プロポーズされたけれど、美香がいるからって断ったよってうれしそうに言っていた。

私も、看護婦になるっていたら、じゃあ将来は二人で田舎に行って開業しようね……ってうれしそうに言っていた。

優ちゃんのうそつき……。

美香のバージンどうしてくれるのよ？

美香死ぬまでバージンじゃなか！

責任とつてよ！……！今すぐ帰って来い！！

誰かにゆすられて、目が覚めた……。

あれ……？

「ちよつと、だいじょうぶか？……ごめん、気がついたか？」

覗き込んでいる、心配そうな瞳、コノヒトハダレ？ユウチャントハカオガチガウ……。

私が、怪訝そうな顔で見ていると、奴はあせつた顔で

「・・・本当に大丈夫か？ 俺が誰かわかるか？」

「・・・ええ・・・ええ・・・わかりますも。私が育んでいた友情を粉々にした、日置真一・・・。手籠めにしただけではものたりず、軟禁して、おもちゃにしてる。」

「・・・なんかもものすごく、俺にとって不名誉なこと考えてない・・・？。」

「・・・事実じゃない！！性別認識だけなら、一回でいいじゃないですか？なんでこんなに何回もいたされているの？ 自分が彼を煽つた事実は棚上げして、彼を睨みつける。」

「ゆうちゃんてダレだ？おまえ、ひとりっこじゃあなかつたけ？」

「・・・言いたくない・・・聞かれたくない・・・もう帰して・・・」

ため息をつきながら、彼は言った。

「まだ、俺の気持ち認識できない？」

「・・・あなたの気持ちじゃなくて、私の気持ちの認識は？」

ゆつくりとこちらを見てしばらく考えて、頭を抱えた後・・・ベツドから降りた奴は服を着ながら、振り向かずと言った。

「・・・わかった、送る。この事は謝る気はないからな？」

そんなことはどうでもいい、私はここから帰りたい。5連休は優ちやんに会いに行くためにとつたんだ・・・。

・・・デモ、ユウチャンハモウイナイ・・・ミカヲ ダキシメテモク
レナイ・・・。

急に私の中で現実が迫ってきた。・・・そうだ、あんなにがんばってバージン守つたのに何でこんなことになっちゃったんだロウ・・・。

「ゆうちゃん・・・どうして、みかをおいていつちゃたの？ 美香のバージンなんでこんなヘタレにとられたの？」

泣き崩れる私を、彼は優しく抱きしめながら、・・・ごめん・・・っ

てつぶやいていた。

！！！やっぱりへたれじゃん！！あやまるぐらいならヤルなっつ！
！謝られても、処女膜は再生しないんだよ！！バカヤロウ！！
私の心の声が聞こえたのか、己の所業をいまさらのように反省した
のか、彼はずっと、私を抱きしめたまま、謝り続けてくれた。
そして、その温かい腕の中で、泣き疲れた私はいつの間にか眠って
いた。

結局、5連休は、彼のマンションで過ごす羽目になった。

もちろん、3食昼寝付き、セックス抜きだ。

お食事？そんなん私が作るわけないでしょうっ？ここぞとばかりに、
こきつかってやりました！。

奴の料理はオムレツ以外も絶品だった。

.....私って.....。

連休が明けて、仕事に出かけた。

おばちゃんに、帰れなかったことをわびたが、電話の向こうで、いいのよ美香ちゃん、でもお嫁に行くときは、おばちゃんにも美香ちゃんから報告してね。・・・と言われた。

・・・相手もいないのに、どうやって嫁に行けというんだろう。

連休明け、私は勤務につくために病院の廊下を歩いていた。

「おはよう、」

耳元で声がした、心臓が悪い……。普通に挨拶できないのだろうか……。

「…………おはようございます、お元気でしたか？」

ずっと一緒だったのに？……と言うような彼の視線を無視して私は詰め所に向かった。

詰所に入ると、ちーちゃんがいた。夜遅いちーちゃんがこんなに早く詰所にいるのは珍しい。

「ちーちゃんどうしたの？朝から？」

「うーん、それがね……」

……？深夜勤の看護婦の歯切れが悪い？何があっただらう？

横をすり抜けようとしたり私の手をつかみ、ちーちゃんと言った

「真一さんをとらんでくれるか？」

……………！？はい？？……………

「こないだ、ふるぽーずされとったじゃろ？」

……………！！はいいい！！？……………

ゆっくりと、深夜勤務者に目を向けた……。曰く5日前からずっと私に言いたいことがあるからあわせるの一点張りだったそうだ。

そういえば、主治医だったよな・・・？

その”真一さん”が詰所に入ってきた。ちーちゃんは、その手を握り締めながら言った。

「あんな小娘の、どこがいいんじゃない！」

苦笑いをしながら、奴はこっちを見てのたまうた、

「おれを、男認定していなかったのお前だけだったみたいだな・・・？ いや、雄としては5日前に、体で認識してくれたんだっけ？」

いや~~~~、うそ~~~~ どういうこと~~~~ という黄色い声が、詰所の中に響き渡り、私は、今日なんで仕事なんだろう・・・と軽いため息をつきながら、この騒ぎの原因を作った彼をにらみつけた。

その視線を、彼はスルーして、お部屋に帰りましょうか？、とちーちゃんに微笑を返していた。

だめ！ちーちゃん だまされないで、そいつはヘタレの悪魔よ！
貞操の危機よ！！

私の心の声もむなしく、ちーちゃんは、奴に車椅子を押ししてもらいご機嫌だった。

仲のいい看護婦の都に襟首をつかまれた私は、ため息をつきながら聞いてみた。

「聞かなかったこと、なかったことに出来ない・・・？」

・・・無言・・・

「・・・わかった、主任、詰所内の收拾に、夕飯1回。」

「・・・飲みにして・・・。」

「・・・わかりました・・・。」

襟首を離して、都は周りを見回し、申し送りを始めます！準備はいいの?! と静かに言った。

一瞬で詰め所の黄色い声は静かになった。・・・さすがだ・・・。
事の顛末を、いつの間にか戻った彼は涼しい顔で入り口で眺めた

後、どこかに去っていった・・・。

あなたが払えよ、！！飲みだい！！！！

騒ぎから2週間、何事もなかったかのような静けさを病棟は、取り戻した・・・。

変わったことと言えばこの2週間、私は彼と必要最低限のことしか喋らず、彼のほうもそうしていたと言うことだ。

明日は、公休日 私は病棟主任である都との約束を果たすためにいつもは行かないこじやれた飲み屋にいた。

「・・・で？ 何があつたの？」
店に入り、オーダーを頼み、日本酒を飲みながら、都がいきなり切り出した。

「・・・もうほとぼり冷めたし、その話はいいいじゃん・・・」

「・・・私が押さえてるに決まってるでしょう！？それとも？無責任な噂を放置しましょうか？」

「・・・それは困る・・・非常に困る・・・これでもアタクシはこの職場が気に入っているんだ。」

「・・・夏休みの前の準や勤務の日に、日置先生が差し入れを持ってきてくれたのよ。そのときに、ちーちゃんが詰所において、ちーちゃんと喋ってたら・・・」

「・・・たら？」

「後ろから、好きだ・・・って、・・・言われたらしい・・・」

「
都が めをまん丸にして私を見つめた、そしてあきれたようにため息をつくと言った。」

「・・・何？その不確定 不確定 他人事のような話は？あきれる

わね？」

私は、都の手を思わず握って言った！

「そうでしょう！！ひどいでしょ！！あんまりでしょう！！」

都は、そんな私の手を冷たく振り解き、手酌で日本酒をコップに注いでいた。

「……私が、あきれているのは あ・ん・た！！」

思わず、声を変えて唸る様に吼える……もとい、語る都に慄きながら 恐る恐る聞いてみた。

「……なんで？ 私が悪いの……？」

驚いてる私に、彼女はあきれた顔を隠そうともせず淡々と言い放った。

「……あんだ、本当に分かってなかったの？ 6年前から、日置の態度は回りにばればれだったじゃないの？ 本人もまったく隠してなかったし。まあ、ローテートから帰ってきてさすがに大人になったのか、公私をつけれるようになったとは思ったけれども、それでも丸分かりの態度だったわよ？ 同期入職の中ではいつまともるかって、かけの対象にまでなっていたのに……本当に？ 分からなかったの？」

私は、ぷるぷる 首を振った……知らない……知るわけがない……

……ぼかんと口を開けてる私に笑顔で、……ちなみに、胸締め私ね……と追い討ちをかける……。

……友情って……？ 人間不信になりそうだ……

いつの間にか、コップ酒は私の分も用意されていた。明日は休みだったよね、事の顛末の一部始終語ってもらおうよ……？ と言うささやきとともに……。

「んで？ すきだって言われてその後、どうしたの？」

「……べつに……」

「小学生とお話してるのかな……？ ワタクシは？ そんなたわごとで許されるとお思い？」

怖い・・・怖いよ都・・・あの人とか、この人・・・どう見ても一筋縄で行かないおじちゃん（教授）達を手玉にとって、病棟をまわしているだけはある。影の番長（師長）だもんね。

一見にこやかに微笑んでいるように見えて有無を言わさないその気迫と、コップ酒の勢いを借りて、私はしぶしぶ白状した・・・。

「最初はね、仕事終わったらラーメン食べに行こうって誘われた・・・」

「都は、3杯目のコップ酒を私に注いでくれた。」

「でも、幻聴が聞こえたでしょう？」

「都が、半眼で私を眺めている・・・怖いって・・・。」

「・・・これはやばいって思って、待ち合わせスルーしようとしたら捕まって・・・。」

「都が首だけで、3杯目を飲めと促した、逆らえない私は指示に従った・・・。」

「飲もうかって彼が言い出して店に行くんだって思ったら、家のみが安いからってマンションに連れて行かれて・・・。」

「都・・・そのガツポーズは何？今度はあたしが半眼になる・・・。」

「・・・彼の好きな人がなかなか落ちない、自分の気持ちに気づいてもいない、男だとも思われてないどうしたら良いんだって、相談されて・・・。」

「・・・なんていったの？・・・。」

「そんな人は実力行使で男だと言うことを分からせる！！　押し倒せ！って・・・。」

「・・・で、押し倒されたんだ？」

「・・・うん。」

「・・・あの、ヘタレにしてはがんばったよね」

「あ！！都もヤツパリヘタレだと思っよね！！」

本日、初めて私と意見があった都の発言に嬉しくなり私は思わず身を乗り出した。

そんな私の笑顔を無視するように、都は続けた。

「但し、アイツがへたれるのは、あんたに関する事だけだよ。」
「……………へ？」

「あの決断力、実行力、頭の回転の速さ、統率力、あんたも分かっているでしょう？」

「……………うん」

「何で、アイツがマンション買ったか知ってる？」

「彼女と暮らすためだって……………あ……………」

「そうだよ、美香 あんたのためだよ？叶うかどうか分からない思いのために、いつもがんばってる、そんな男だよ？」

「……………そういえば、目的があつて、車にまで資金が回らないって……………」

「ねえ、美香？忘れられない思いがあるって言うのは分かるけれどもいつまでその思い出を引きずっているの？そろそろ前を向いても良いんじゃないの？」

「……………ズキン……………シンゾウガイタイ……………」

「思い出の中の人が、美香を抱きしめてくれるの？ 守ってくれるの？」

「……………イキガデキナイ……………ヤメテ……………」

「ねえ、美香足元を見てごらんよ。今、あなたのそばにいるのは誰？支えてくれるのはだれ？」

「……………胸を押さえながら、思わず私は聞いた。」

「……………都……………あなたは、どの位に賭けたの？」

下を向いた都が思わず舌打ちをしているのを、私は聞いた……………確かに、聞いた……………」

「帰ってきてから、2ヶ月以内。」

「……………倍率は？」

「……………70……………」

「……………一口……………」

「……………千円……………」

眩暈がする……………いつたい何人が参加しているんだろう？ 観念し

た都を締め上げて参加者の名前を聞く、教授陣の名前まであげられるのを聞いて、・・・頭痛までしてきた。

でも、体だけじゃねえ〜 心もってつてくれないと意味ないじゃん・・・。ってボソリと言った、都の言葉に温かい気持ちになった私は甘いのかな？ゴメンね心配かけて・・・。

4杯目の、お酒に手をかけた・・・。

「ごめん！！遅くなった！！！」

「・・・ほんと、帰ろうと思ったよ？」

5杯目で、潰れてしまった美香を横目で指しながら、都は声の主に言った。

「・・・ごめんって、出ようと思ったら、緊急内視鏡の手伝いが欲しいって言われて、活動性で、止血に手間取ったんだ。」

ビールお願いします・・・と注文をしながら、声の主はお絞りで手を拭いた。

・・・さり気無く横に座り、美香？と甘い声でささやきながら、そのささやいた相手のかみの乱れを直してやっている男を都は観察していた。ささやかれた姫はグウスカピーと夢の世界だ。

「ヤツたんだってね・・・？」

ビールを思わず噴出しそうになっている相手を見ながら、都は淡々と続けた。

「ヘタレ返上出来たんだ？」

「・・・それは、どうだろう・・・」

苦笑いをしながら、男はビールを飲み干した。美香が言ったのか？と男は聞いた。

「・・・あほか！ 詰所で自分が言ったことも忘れたの？」

ああ・・・あれね・・・。そんなに、きわどいいい方だったっけ？と

平然と返す。

ホントにこの男は、美香に対すること以外だと悔しいほど冷静だ、あれもどうせ他のライバルの牽制にするつもりでわざと言ったに決まっている。

「ちーちゃんがショックで認知症がましになっただてよ？いくつになっても女は恋をしないと駄目だよな？」

「・・・それ、こいつに言い聞かせてくんない？・・・と 自分の隣で撃沈している女に言葉とかけ離れた優しい目を向けながら言った。」「・・・あ、じゃあ手にいれたのは、体だけで、心は入ってないって、自覚はあるんだ」

「・・・ほんと、遠慮なしだね、おまえ・・・」

「体も、この調子じゃ一度だけの思い出って可能性もあるわよね」

「いやもう、二桁には載らないとは思っけれど・・・近いと思う・・・」

「あんな、一晩でなんかいしたの？」

鬼畜！！と叫ぶ都に、何で一晩だと思っただ？と返したら、だって、美香が許すわけないじゃん。と返され反論できずに黙ってしまった。

「・・・一晩じゃないぞ？夜中から夕方にかけてだ。」

「・・・一晩は延べ2日でしょう？夜中から夕方なんて1日じゃない？もつと駄目じゃん」

ああいえば、こついう・・・さすが美香の親友だ・・・たちが悪い。隣で寝ていた美香がもそもそと動いた。

「ううん・・・優ちゃんだあ、美香を迎えに来てくれたの？嬉しい！」

抱きつかれて、思わず固まる・・・？ちょっと待て？だから？優ちやんで誰だ！？

ああ〜確かに雰囲気は似てるかもしれない、でもあつちのほうがへたしてなかったけれどね・・・。都のあまり嬉しくない台詞を聞

きながら、抱きついてきた美香を思わず抱きしめて抱えなおす。

「こいつ、兄弟いないよな？優ちゃんて誰だ」

「・・・知りたい？」

「・・・」

「・・・美香が、敢えて公言しないことを、私の口から聞きたい？」

「・・・」

「いいよ、教えてあげても？」

「美香に聞くからいいよ。」

都は、にっこり微笑んで。よかつたわ・・・と言った。

「ヘタレ返上のご褒美に、美香のお持ち帰りを許してあげるわ。」

ビールを自分のコップに注ぎながら、都は言った。驚いてる僕をちらりと見ながら、但し美香の気持ちは美香のもだけれどもね・・・
といやな台詞をはく。

判っているよ、スタートラインに立つ権利が手に入ったただけだと言うことは・・・。

いままでは、その権利さえ持っていなかったんだから・・・。

あわてず、確実に、手に入れて見せるよ。・・・ずっと、俺のものにしてみせる。

俺の腕の中ですやすやとねいきをたてる美香の頭のとっぺに口付けを落とした。それを見ていた都が言った。

「続きは場所を変えてください。」

そのままの体制で、僕は都に視線を向けた。そんな僕を見据えて、都は言った。

「・・・別にあなたじゃなくてもいいのよ・・・？美香をしあわせにしてくれる人なら誰でもいいの、今たまたまあなたがいるから頼んでいるだけよ？もし、少しでも美香の意に反することをして、美香を傷つけることがあったなら、覚悟はしておいて・・・ね？」
こちらを見て静かにそれだけ言うと、都はにっこり微笑んで店員に

お愛想とタクシー2台お願いしますと告げた。

嵐のあとで

くくくんんんあつたかいくくふわふわするくくいいきもちくく

私は、ゆっくりとその感触を味わうとともに薄目を開いた。

大きな腕、温かい広い胸、そして、優しいにおい・・・あれ・・・？

「・・・？優ちゃん？・・・」

「だからそれは誰だ？」

聞きなれた声が頭上からする。都は？ここは？

「・・・俺のマンション、水飲むか？シャワー浴びるか？気分は大丈夫か？」

声の主は、啞然とした目を向ける・・・なんであんたが？何で私はここに？

「・・・酔っ払いをつれて帰れないって都が俺にSOS出したんだ、あいつもかなりよってて、アパートに送っておいたよ。」

それでなんで私は、あんたのマンション？じと目でにらむ私の視線を避けながら、奴は言った。

「都が、お前は飲みすぎたから一晩隣で様子見たほうが良いっていうから・・・仕方ないじゃないか！」

なんか・・・すごい言い訳に聞こえる・・・。にらみ続ける私の視線をかわしつつ彼は言った。

「それとも。ERで点滴したほうがよかつたか？」

「・・・その事態だけは絶対避けたい・・・。」

「ありがとう、でももう大丈夫だから・・・帰るわ」

立ち上がるうとして、ふらついた。おかしい、そんなに飲んでないはずなのに・・・？

ふらつくあたしを抱きしめるように支えて彼は言った。

「泊まっていけよ、お前の嫌がることはしないって約束するよ。それに、この状態で帰したら俺が都に怒られる」

・・・本当に？・・・ならこの手はなんだあ？

「・・・だって、おまえ、離れたらこけるぞ？」

「紅茶が飲みたい・・・」

わかった。と彼は言い私を軽く抱きしめ（られたように感じただけかもしれないが）キツチンへと向かった。

私は、ローテーブルを前にクッションにもたれて座った。ミルクで良いか？と声をかけられて、うん・・・と返事を返す。湯気のたったミルクティーのはいつたカップが置かれた。

「・・・優ちゃんて誰だ？」

「・・・いいたくない、あなたには関係ない・・・」

私の、きつぱりとした拒絶に少し彼は傷ついた顔をした。

「・・・隣に座ったら駄目か？」

「・・・どうぞ・・・」

私の返事に、少し驚いた顔をしてそれでも嬉しそうにこちらへ来る・・・くそう・・・少し心が揺れる。

相変わらず、必要以上に密着してくるやつの身体と少し距離を置こうと身体をよじる。

「・・・お前の身体温かいな」

こちらを覗き込む彼の目と私の目が重なった。温かい・・・？それは、あなたのことだ。

・・・。。。本当に温かい・・・。生きてる人の温かさだ・・・。

心地よさに身をよじって作った距離が縮まる・・・。

いつの間にか、抱きしめられていた。でも私はこの温かさを離れたくなかった。そして私もこの温かさを抱きしめる。

「ほんと、何もしいから・・・。」

頭のとっぺんに、やさしい振動と、温かい吐息を感じながら、いつ

の間にか私は夢の世界にいた。

「きてたんだ。」

「お風呂沸いてるよ？食事はどうする？」

あれから彼は本当に抱きしめる以上のことをせず私を一晩中暖めてくれた。

そして、その温かさで心地よさに味を占めた私は休みの前日は度々此処に通うようになっていた。

そして、友達以上、恋人未満の、生ぬるい関係が続いている。都のいい加減にしないね？と言ったため息とともに。

「おかず何？」

「んん〜ホイル焼きと、味噌汁、又タと冷奴。」

「風呂入ってくる」

もう時刻は日付けが変わろうとしている、ホイル焼きを焼いているとお風呂から声がかかる。

「お前は食べたの？」

食べた、と風呂場に向かって答える、ビール付き合っただしとくねと答える。

「〜あ〜うまい」

当たり前のように私の隣に座り私を抱きしめるように抱えながら、彼はビールを飲んだ。そして、私の肩に顔をうずめながら、美香のにおい良いにおいとたまう。

いやいやいや、ちょっと引っ付き過ぎでしょう……。内心突っ込んでみるが、この2ヶ月それ以上手を出さない彼を信用している

私は黙ってされるがままにしていた。

ビールを飲みながらホイール焼きをつつき、彼は言った。

「おまえ、ERの教授と知り合いか？」

首を回し、彼の顔を見ながらいわれた言葉の意味を考える。

「今日、肝破裂の患者のエンボリを頼まれたんだ、そのとき、教授もいてな？・・・お前に手を出すんなら自分の許可を取れと言われた。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「この世で一番大事な娘だから、中途半端な気持ちなら覚悟しろよ、とも言われた。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「縁戚関係でもなかったよな？」

私の顔をちらちらと伺いながら、言葉が続ける。ただの知り合いにしては、真剣に言われたぞ？ちょっとびびったかな？・・・という彼のため息を聞きながら、まだ気にかけていてくれたんだ・・・まだあの人の中でも終わってないんだ・・・と私は身を硬くした。

「？ごめん？なんか気に障ったか？」

私の変化に気がついた奴は、あわてた声で私に言った。

「なんでもない。何もなし。」

質問の答えになっているような、ならないような返事に、彼はそれ以上の質問をせずに黙って食事を再開した。

食事を終えて、飲み足りないのか、私の隣でもう一本ビールのプルタブを引いている彼を私はボーっと見ていた、時刻は2時を過ぎようとしていた。

「まだ、寝ないの？」

ああ、今日は気になることがあったから眠くない・・・こちらを見ずに返事を返す彼の横顔を見ながら、わたしは、言葉を選びつつ話し始めた。

「・・・昔のね・・・知り合いが、榎原教授の下で働いていたの・・・。そのときの何回か、マッキーにはあったことがあるの。私が高校生するときだから、もう、12年になるのかな？昔は、あんなに怖い人でなくて、優しいおじちゃんだったんだよ？」

彼は私の顔をみて眉をしかめながら・・・お前仮にも教授に向かつてマッキーてなんだ？・・・とあきれた声で言った。

「だって、就職してから会ってないし、私の中では、12年前のマッキーの顔しか思い浮かばないもの。私がつけたんだよこのあだ名？かわいいでしょう？」

微笑む私をビールを飲みながら彼は見ていた。私は言葉を続けた。

「12年もたつたんだあれから・・・。私もつすぐ30になっちゃうんだよね。」

お前それはいきなりでしょう？まだ、20台でしょうと彼が苦笑いしながら言った。

「・・・ううん・・・あの時はまだ、16だったんだ。覚悟も何にも出来ていなかったんだもの、どんな言葉が相手を傷つけて、どんな言葉を伝えたら良いかもわかってなかった。だからあんなことになっちゃったんだ・・・。どんなに後悔しても時間は戻らないよ・・・ね？」

お前酔つてんの？と居心地が悪そうに彼が言った。それなら今から謝れば良いじゃないかとも・・・そして、なんなら俺と一緒に言つてやろうか？などとぼけたことを言う。

「もう、無理なんだ・・・。謝れないのよ。」

横にいた彼にゆっくりと抱きついた。

「あなたは、温かいよね・・・。とつても・・・。こうしているとほっとする。」

抱きついて、胸に顔を摺り寄せる私を、彼はそっと抱きしめてくれた。そして、ゆっくりと背中をなでてくれていたが、そのうちに、

なぜか身をよじった。・・・あれ？

「・・・・・・・・？ねえ？・・・・・・・・」

「・・・・・・・・言うな・・・・・・・・」

「・・・・・・・・何か、異変が起きてませんか？」

「だから、口に出すなっつて！！！」

真っ赤になっつてうつむいている彼の顔を、私はまじまじと見つめた。

「治まりそう？トイレに行く？疲れているんじゃないの？何でこんなに元気なの？」

「お前には、男の生理を理解して、さり気無く恥らう気遣いはないのか？」

「・・・・・・・・そんなん、6年も看護婦して、28年生きてきた私に求めたつて無理よ？まさか、私に収めるのを手伝ってくれなんていわないわよね？手でも、口でも遠慮させてもらおうよ？」

「・・・・・・・・おまえこないだまで・・・本当にバージンだったんか？・・・」

「あんたが、無理から奪つといてよく言うわね〜〜という台詞から逃げるように、彼はトイレに向かつていった。よしよし、自分で何とかしてください。」

「・・・・・・・・あんたつて、鬼ね・・・・・・・・」

都の冷たい視線を無視しながら、事の顛末を都の部屋で飲みながら私は語った。・・・。

「ホンで、あいつを煽るだけ煽つて拳句、好きな女に擦り寄られて欲情したあいつのぶつを冷静に観察して自分は後始末せずに相手にさせたんだ。」

「・・・なんか、都の言い方ヤダ・・・身もふたもないじゃん・・・」

「その状況を、どう脚色しろと？」

「まるで、私がろくでなし見たいじゃん」

「ろくでなし以外のなんだと言うんだ！！？ 充分ろくでなしだよ？ あんた男心を弄ぶのはいい加減やめるよね？ どうせ、バージンささげた相手じゃない？ いまさらでしよう？ させてやれよ！！」

「だから、身もふたもない言い方やめてって。それに、捧げてない、奪われたんだって！！」

都は、キッツ！！とこちらをにらみつけ言い放った。

「休みの前日にしょっちゅうお泊りに行ってるくせに今更だよ！！ あれから、やってなかったなんてびっくりするわ！！ あいつのヘタレ具合と忍耐力に拍手喝さいだね！！」

「だから・・・そんな関係じゃないって・・・。」

まだ言うか！！！！ じゃあ、あいつにかまうな！！ きっぱり切って捨てる！！ 奴のために！！ それが本当のやさしさだ！！！！ 「都の剣幕に私は黙り込んだ。そうだ、都の言うとうりだ。わたしは彼の温かさと彼の優しさに甘えて、優ちゃんにあえない寂しさを埋めようとしている。」

「ねえ？美香。」

打って変わってやさしい口調の都の顔を見上げた。

「思い出は捨てる必要はないけれど、思い出はあんたを暖めても抱きしめてもくれないんだよ？ 今一番大切な人は誰か本当はもう分かっているんでしょう？ このままだとあなた、また後悔するよ？」

ひざを抱えて円くなりながら都を見つめた。

「でも・・・やっぱり、わたしは、優ちゃん以外の人のお嫁さんになれない。だって、約束したんだもの。」

私は都の、あきれたようなため息と、ドンだけすり込まれるの？ こんなん置いていつてほんまに罪な男だよ・・・というつぶやきを黙って聞いていた。

はじまりのはじまり（前書き）

血は出てきませんが、事故の処置のシーンがあります。・・・苦
手な方コメントナサイ。

はじまりのはじまり

私は、夜勤を終えて帰宅の準備をしようと詰所をでた。

「ああ、中野さん悪いけれど帰る途中で良いから、これ急外に返してくれる？」

使うからと取り寄せた器具が不要になったからと師長にことずけられた。ロッカーに行く途中だから良いですよと荷物を受け取りERへむかった。

ERは喧騒の真っ只中だった、

「中野さん！よい所にきてくれたわ手伝って！！！！」

構内を出たところで事故があり、巻き込まれた歩行者が心肺停止状態で運び込まれたらしい、ホットラインは鳴らず、救急隊の独自の判断で搬入してきたので、人手がないとのことだった。

「右側から軽自動車に当たられています。そんなにスピードは出ていなかったようですが、当たるまで運転手は気づいてなかったようです。最初呼吸は浅かったですがありませんが、右の呼吸音が減弱していました、腹部の打撲痕、骨盤の痛みが見られました、そのうち呼吸状態がおかしくなったので補助換気をしたら、急にバックマスの抵抗が出て心肺停止になって。」

若い隊員の説明を聞きながら患者の視診、触診、聴診を続ける奴がいた、

「竹沢、ルートとって、取れなかったら骨髄路で良い。本田、右緊張性気胸の可能性がある緊急脱気しる場所分かるな？右側だぞ。

婦長さんオペ室に連絡してくれませんか？右側から軽自動車に当てられ、骨盤骨折、腹腔内出血の可能性の患者がいる。カテも同時にするって、止血がいるって、腹部外科と整形にも同様に伝えてください。念のために胸部外科にも声かけて必要だったら呼ぶって言っと

いてください、血型調べて血を手配して下さい、本田脱気出来たか？出来たらオペ室に移動。」

次々と指示を出しながら、研修医の手元を見ながら処置を一緒におこなっていた、でも、私は、処置台に乗せられたその若い男の人と12年前の思い出が重なって足がすくんで動けなかった。

そんな私を見て奴が叫んだ、

「中野！ガウンつけて手伝って」

でも私は動けなかった。

「美香！！お前の職業はなんだ！！」

こちらを、まっすぐな瞳で見ている奴を見つけて、私はわれに帰った。

「そうかん準備します。」

頼む、と奴に肩をたたかれ、私は救急カートに向かった。

処置に反応し、患者はオペ室へ向かった、時計を見たら、まだ此処についてから30分もたっていないかった。もつと過ぎていると思っただのに。

「助かったよありがとう。」

こちらに、笑顔を向けながら奴が向かってきた、その笑顔をポーと見ながら私の回りは、暗くなっていた。

「・・・美香・・・」

ダレカガヨンデイル

「美香」

心配そうに覗き込んでいる奴がいた、ありがとう助かった、お前本当に外傷嫌いだよね、巻き込んで悪かったな？ 彼に本当に済まな

さそうに謝られた。当直室のベッドに寝かされていた。

「あの人・・・どうなったの？」

「今のところ助かると思う、処置が早かったし。」

でもいきなり搬入は勘弁して欲しいよな？と彼は頭の後ろで腕を組みながら言った。そしてこちらに視線を向けていった。

「槇原教授にしかられた。」

「・・・？」

「内科しか経験のない部外者に無理やり手伝わせて、患者増やすな・
っつて」

私は、ベッドの上に取り上がりひざを抱えて笑った。

「他に何か言われた？」

ううん・・・まあ・・・と歯切れの悪い返事を返した後、彼は 私の顔を覗き込みながら言った。 今日来るか・・・？と 無理にとは言わないけれども・・・とも言った。

「ワイン ロゼ冷えてる？」

こちらを見てにつこり笑って、かって帰れば良しさ、僕が帰るまで仮眠してて？テイクアウトのイタリアンで良いか？ときかれて、私はうなずいた。

彼のマンションで、テイクアウトの夕食を食べながらワインを飲んだ。

「隣に座らないの？」

私が聞くと苦笑いしながら彼は、この前のことがあるから今日はやめとくと神妙な顔で返す。 気にしてたんだ？と私が笑うと、当たり前だろう・・・と真っ赤になって、向こうを向いた。

そんな彼の横顔を見ながら私はゆっくりとはなしはじめた。

「産まれたときからそばにいてくれたんだ。」

「・・・え？と彼がこちらを見た。」

「隣の、12歳年上のいとこのお兄ちゃん。中学2年の夏にプロポーズされて、高校卒業したら結婚する約束をしたの。でも結局、事情があつて、16の誕生日に籍は入れたの。中野は彼の名前。私の旧姓は橘。」

「・・・なんだそれ？ロリコン？下を向きながらボソリと彼が言った。うん、自分でもロリコンだねって言ってた。でも、美香がもし他の奴に取られたら悔しいから早い目にマーキングするんだって言った。」

「優ちゃんはね、マッキーの下で働いてたんだ。だから、榎原先生とは何度もあつてる。結婚式にも来てもらう約束していた。」

「・・・彼は、下を向いたまま黙って聞いていた。」

「籍は入れたけれど、卒業までは何もしないうって約束だったのに、その夏に、旅行に誘われたの。けれど怖くていけなかったの。何もしないうって言ってたけれど信じられなくて・・・終いに喧嘩別れしたの。」

「・・・彼は下を向いて無言で聞いていた。」

「彼が一人で出かけたその日、クラブ活動していたら、お母さんが来て・・・」

両手を握り締めた、

「救急医してたのにね、自分が事故で死ぬなんて思ってなかったらうね。」

声が震える・・・涙が止まらない・・・。

「もういい」

いつの間にか隣に来た奴に息が止まるほど強く抱きしめられた。

「俺はそばにいる、どこにも行かない、俺じゃ替わりになれないか？」

アナタハオニチャントハツガウ、ミカヲアタタメテクレル・・・

アナタハアタタカイ・・・。

「・・・温かいね」

私の独り言で彼の腕にますます力が入るのを感じていた。抱きしめられたまま時間がゆっくり流れていった。

「・・・いいか？」

かすれた声で彼が聞いてきた。私は顔を上げずにうなずいた。

温かさに、ゆっくりと彼の重みが加わっていくのを、全身で感じていた。

理想と現実との折り合い（前書き）

医療関係の話が続きます。

一つの考え方・・・と思って読んでいただけると、ありがたいです。
だいが、シリアス。・・・長いです。

理想と現実との折り合い

最近、彼の勤務時間は殺人的である。

ERの榎原教授に目をつけられたこともあり、何かとってはお呼び出しを受けており多分殆んど寝ていないのではないだろうかとも思う。

だからといって担当の入院患者が減らされるわけでもなく、本当に出来る人ほど仕事が増えてしまうこの体制はぜひ改善すべきだと、一人憤慨していた。

日勤終了の、5時過ぎにやっと彼は病棟に顔を出した。今日新入院を持ったはずなのに、診察は出来ず、ルーティーンの指示のみ電子カルテで出していた。

「山下さんの息子さんが先生はまだかつて・・・」

入ってきたばかりの彼に、若い看護婦がいいにくそうに言った。今日の入院患者の息子だ。もう、98になる母親に、少々マザコン気味のきらいがあるというか・・・寿命・・・ってなんだったろうという勢いで、延命にこだわる。

「ムンテラするから呼んでくれるかな？」

判ってるよありがとう、と言わんがばかりの笑顔に向けてやさしく微笑む。くううくうその笑顔私にもくれっ！！最近まともに会話してない・・・。

やがて、山下さんのご息が詰所に入ってきた。彼は向き合って、病状説明を始めた。

「肺炎を起こしてます。レントゲン像から誤嚥性だろうと推察されます。食事は胃に直接入れたチューブから取られているので、肺炎の原因は、ご自身の唾液を飲み込むことが出来ずに、肺のほうに流れてしまったのが原因かと考えられます。ご高齢なこと、栄養状態のこと肺炎の原因を考えると非常に厳しい状態ではないかとおもわれます」

息子は、はんかちを握り締めていった。

「入院期間はどの位になりそうでしょうか？」

彼は、それはいつ退院できるかと言う事ですか？と聞きなおす。

「これ以上認知が進まないように、なるべく早くつれて帰りたいんです」

彼は、ゆっくりと息子に告げた。

「非常に残念ですが、予断を許されない状態です。いつ何時急変されてもおかしくはありません。合わせたい方があるなら早い目に連絡してください。」

息子は、目を見開いていった。

「それは、入院期間が長くなるということですか？」

彼は、息子の目を見て静かに言った。

「残念ですが、お母さんは非常に高齢で、現在の医学ではこれ以上の治療は難しいということです。たとえば機械で延命を凶つたとしても、機械から離脱するのは非常に難しいと思われます。そのためにかえって、しんどい時間を長引かせるだけになる可能性も有ります。」

息子は椅子から立ち上がり叫んだ！

「やめてくれよ先生！あんたたちが見放したら俺たち素人はどうしたらいいんだ？無責任じゃないか！何とかするのがあんたの仕事だろっ？」

「残念ですが、僕の知っている限り、お母さんに施せる治療は非常に限られ、また殆んど効果のないものばかりです。そして僕の見限り僕が感じるのは、お母さんに必要なのは延命治療ではなく横に座った家族の温かいぬくもりを感じることでとおもいます。」

息子は、まったく奴の話の話を聞かず、母は女でひとつでしてくれただこと、苦労ばかりかけてまだまだ長生きして欲しいこと、目見放すようなことはして欲しくないこと……。どんな姿になっても行き続けて欲しい事・・・を延々と喋りつづけていた。そしてそれを彼は黙って聞いていた。

「・・・あ・・・来てたんだ」

「食べるものだけ作るところと思って」

日勤を済ませて、食料を冷蔵庫にストックしようとした彼のマンションをたずねていた私は、思わぬ早い帰宅にびっくりとした。

「早いね、まだ8時だよ？」

「風呂と着替えに帰ってきた。おまえこそ明日日勤じゃあなかったけ？めずらしいな、やすみじゃないのに」

「疲れているだろう恋人の体調を心配して、食事を作りに来ちゃだめ？」

ちよつとびっくりした顔をしたその後、夕方詰所で見た笑顔の3倍にした極上の笑顔を私に向けて、私のほうに手を伸ばしながら、ありがとう嬉しいよ。といった。

お風呂に入った後に夕食を食べさせて、夕食のかたづけをしながらリビングを見るとクッションにもたれて、うとうとしている彼がいた。

「寝るんだつたら、ベッドに行つたら？」

「いや、山下さんが気になるし、病院に戻る」

私は顔をしかめた。

「老衰につける薬はないっていつてやればいいのに！！」

「それは、俺たちの考え。患者家族の思いとは別もんだろう？」

おまえそれ患者にいうなよ？と苦笑いしながら彼は言った。

くうくそれは分かってるって、でもこのままだとあなたのほうが倒れちゃうよ？という私の訴えが心に響いたのか、それとも本当に疲れたのか、彼は当直医に電話をして今日は疲れたのでもう行かない状態が変わつたら何時でも電話して欲しいと伝えていた。

そして、そのまま本当にすぐに寝てしまった彼の寝顔を見ながら、私も眠りについた。

詰所の中に罵声が響いていた。

「何で今日明日なんて言いかたしなからおまえがいないんだよ！！」

罵声の主は山下さんの息子。そして怒鳴られているのは彼だった。入り口で啞然としている私にきずいた都は私の手を引き、詰所内の休憩室に連れ込んだ。

「何があったの？」

「昨日の23時に山下さんが急変して、息子はちょうど自分の荷物を取りに病室にいらなくて、夜勤者は日置呼ぼうとしたんだけど、当直医が岡ちゃんんで、呼ぶな必要ない俺が責任とるって言って、結局奴は挿管も出来ずこの騒ぎ」

「……レスピ希望したんだ」

「うーん、日置は乗り気じゃなかったから、もう一度よく考えてくださいって保留にしてて、岡ちゃんは年齢とプロフィールみて必要なって家族と話もせず決め付けてただけけど……、息子さんに何とかしろって言われてあわてて……おまけにアイツは挿管経験少ないし失敗して、ますます挿管困難になって……。」

「それで主治医に連絡もせず？岡ちゃんてアイツの上だっけ？」

「そうそう、まったく使えない8年目、ローテート先からも早々に放りだされてたからね。役に立たなくても先輩ってのが辛いわよね。」

怒鳴り声はまだ聞こえていた。患者の権利と人権について叫んでいる。何をふざけたことを言っているんだろ？じゃああなたは医者に過労死しろと言うのか？手のひらに余る命を救うために彼がどんなにがんばっているのか見ていないからそんなことがいえるんだ。私はこみ上げる怒りに震えていた。止める都を押し切って、反論するために詰所に出ようとしたそのとき。

「あんだ、寿命って知っているか？」

ちーちゃんだった、そういえば前回入院のとき、山下さんと病室が一緒だった。

「あんだのお母さんが本当にあんたが希望するように、生きるってことにこだわっていたと思うのか？」

ちーちゃんが山下さんに諭しているのが聞こえた。

「口から食べられず、管を無理やり胃に通されて栄養を取って生かされているそんな生活をあんだのお母さんは自分からして欲しいって言っていたのか？」

「お母さんが、生きる事にこだわっていたのか？ あんたが生かすことにこだわっていたのか？ どっちかな？」

「あんだが、やさしいこだって言うのは知っているよ。だって見たからね。」

ちいちゃんは静かに続けた、

「でも、もし私なら子供のエゴで生かされるなんて真っ平ごめんだね。」

「あんだは、ほんとうにあんだのお母さんが延命を望んでたと思っ
て言っているのかね。」

山下さんは黙ってちいちゃんのことを聞いていた。そしてしばらく考えた後、彼に向かってお世話になりました。失礼しました。・・・

と行って去っていった。

山下さんの息子が帰った後、都はちいちゃんの手を握って、ありがとうって言うていた。ちいちゃんは、にっこり微笑んで、真のほうを向いて

「どうじゃ？ぐらつと来たかの？あんたに対する愛情ならあの小娘に負けんぞ？今からでも遅くないと思うがの？」

うなだれながら椅子に座っていた彼は啞然とした顔をちいちゃんに向けていたが、いきなり笑い出した。

「ものすごく来ましたよ。ありがとうございます。」

彼の言葉に満足そうな笑みを浮かべて、ちいちゃんは休憩室の入り口にいる私をみてふふんと鼻で笑った。

私は、その日彼のマンションで、彼の帰りを待った。

「……きてたんだ。」

おかえりなさい……と、微笑んだ私に、複雑そうな笑顔を返して彼は言った。

「……今日は、独りになりたいんだけれども？」

夕食をテーブルに並べる私を見ながら、彼は重ねて言った。

「まあ、たべたら？さめちゃうわよ？」

彼の言葉を見無視した形の私の発言に、ため息をつきながら彼は腰掛けた。手を合わせて食事を始めた彼に私は声をかけた。

「……ビールだそうか？」

こちらを見ようとせせずに、いらない……と答える。

食事を終えた彼の隣に私は腰掛けた。彼は身をよじり少しずれて距離を置こうとする。

「……きてるね？」

「……そうだな」

「あなたが悪いわけじゃないでしょう？神様の領分じゃないの？」

ゆっくりと、こちらを見据えて、再び下を向いて彼は言った。

「・・・疲れてたからって、家族が納得できるまで話し合いをせざるに放り出していたのは、俺の責任だ。ちーちゃんが助けてくれなければ、まだ山下さんは納得できなかったかもしれない、レスピに乗せてたとえ離脱できなかったとしても、山下さんの息子さん自身にそれを見せて、ご自身で考えてもらうのもひとつの方法だったと思うんだ。でも、結局あのとき疲れていたことをいい訳にしてそれを提案しなかったのは、俺の問題だ」

「・・・あの、マザコン男がそれでも納得しなかったら？」

「それは、言い逃れの推論だ。俺が、山下さんの息子さんがつけられるように、全力を尽くさなかったことに変わりがない。」

「・・・それを、あなたにかかわる人全員にあなたがしていたら、あなたつぶれちゃうよ？」

分かっているよ、力量不足だってことは・・・頼むからほつといてくれないか？・・・と彼は自分のひざに顔をうずめながら言った。

むうう・・・。聞いていてむかむか怒鳴りたくなった私がい。完全主義のヘタレっつ！？自分のキャパシティ以上のことを自分に求めるなっつ！・・・イカンイカン、ここでこんな事を叫び、けんかしたら、彼にますます追い討ちをかけてしまう。今日は彼の言う通り帰った方が良くかもしれない。

食べ終わった食器類をかたずけて、風呂に入れるよう準備した。荷物をまとめて、おいとまする旨を伝えようと彼のほうを見た。

・・・小さくうずくまり、一人で自分を抱きしめている彼の姿が見えた。・・・

？ワタシハナニヲシテイルンダロウ・・・ワタシハナニモノナンダロウ・・・？

甘えたいときだけ彼を利用している私。

激務の中でも、患者や家族と向き合いすべてを受け止めようと努力し、自分を取りこぼした思いを、自分がふがないせいだと、自分をせめて打ちひしがれている彼。

彼の何を見ているんだろう。

彼のこんな時に自分を責めるばかりで回りの助けを求めようとしな
い不器用なプライドを尊重し一人にして良いんだろうか？
わたしは、彼のそばにひざまずいていった。

「・・・帰るよ？・・・本当に帰っていいの？」

顔も上げずに彼が、ああ・・・と言った。

私は、彼を包み込むように抱きしめた。

「なに、がんばっているの？あなたのヘタレ具合は、しっかりばれ
ているよ？私は貴方の弱い部分も、へたれた部分もすべて好きだよ。

」

彼は、やっと顔を上げてこちらを見た。なんだ？お前からのいわれ
具合だと、俺って救い様なさそうだな？と、笑った。

そうだよ？知らなかった？私は知ってたけれどね。でもそんなあな
たもすきなんだよ、私の台詞にゆっくりと唇を重ねてきた。

「でも本当に、今日は帰って。お前がそばにいたらお前を抱いてし
まう。でもこんな気持ちでお前に触れたくないんだ。」

「私は、今日はあなたを抱きしめて寝たい。それ以上のことはさせ
ない自信はある。いちや駄目？」

お前の守りは鉄壁だもんな。・・・と笑いながら風呂に入ってくる。
と彼は言った。

そして、彼は私の腕の中で私に抱きしめられながら眠りについた。

山下さんの息子さんからお礼の手紙とお礼のお菓子が詰所に届いていた。ちいちゃんにも面会して頭を下げていたらしい。

ちいちゃんという言葉も有ったとは思うが、私は、彼の思いも伝わっていたとも思いたい。

「10年たつたらもつとキャパ広がってるだろうね。」と私が言う
と。

「10年たつたら違うイベントが発生してるだろうね」と、あいつ。
お菓子をつまみながら、彼は淡々と返してきた。何であなたが、看護婦休憩室でお茶してるんだ？こら、勝手にカップ出すな、コーヒ
ーいれるな！
紅茶はないのか？と勝手に棚を物色している彼の後姿を見ながら、
心の中で突っ込んでみた。

「その時イベントに負けてへたれない根性を身につけて頂戴」

私の台詞に彼はにっこり微笑み、
「そのときはまた一晩中抱きしめて慰めてもらうから良いよ」
と、のたもつた。ここは職場じゃ！！しかも休憩室じゃ！！！真
っ赤になって口をパクパクさせてる私を無視して、入り口から入っ
てきたスタッフに、すみませんお茶ただいでます。と 涼やかな
貴公子のえがをを振りまいていた。

しょうがない、何時でも抱きしめてあげるよ……。

その事件の後から、休みの前日だけでなく時間を作っては彼のマン
ションに通うようになった。

めんどくさいからここに荷物を移したら？ という彼の提案に、

でもすぐにはうなずけない私もいた。黙っていると、なんともいえない顔で無理には言わないよ・・・とかえされて胸が疼いた。何で思い切れないんだろう、優ちゃん的笑顔が浮かぶ・・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・ゴメンナサイ・・・・・・・・。。

次へのステップ

世間はいわゆるクリスマスと言うイベントにさしかかろうとしていた。

世間一般の常識？にはずれることなく、クリスマスプレゼントをリサーチしてくる彼をのりくらりとかわしながら（だって、宝飾店に誘うんだよ？いい機会だからとかいいながら・・・。）私は日々の生活に追われていた。

休みをあわせて、珍しく外で映画を見る約束をした。甘あまの恋愛ストーリーを希望する彼の提案を却下し、アクションホラーを指す。開演まで時間があるので、隣の店を覗こうと連れて行かれた先は、いわゆるジュエリーショップだった。

「・・・何しに行くの？」

「クリスマスプレゼント、この間雑誌見ておまえが欲しいって言ったたネックレスがこの店においてあるんだって。」

「・・・なんで、宝飾品の売り場の品揃えをこいつが知ってるんだ？しかも人の行動をよく見てるよね？怪訝そうな顔をしている私に、彼は、

「実物見て、気に入らなければやめればいいし、見るだけならいいだろう？」

彼の言葉に、もっともだと思い直し、あのネックレスの値段を思い出しながら促されて店に入る。

店の中は、クリスマスの飾り付けで華やいでいた。

「いらっしやいませ」

笑顔の店員に向かって、彼はネックレスの特徴を伝え案内を頼む。につきり微笑んだ店員が、私と奴を促すように奥に設けられたクリ

スマス用の特設コーナーに案内する。

「ご希望のものはこちらにあると思うんですが。」

店員に促されて、ショーケースを見ると、あった。あの時雑誌に載っていたネックレスだ。でも、名のとうったブランド物のそれは値段もそれなりだった。

「どう?」

いつの間にか、隣にたつて肩を抱いてきた彼の顔をみながら、私は、ためらいがちに口を開いた。

「どうって・・・素敵だとは思っけれども・・・ねえ・・・」

私のためらいをきずいてないのか、無視しているのか、試着可能ですか?と彼は店員に言った。・・・いやいや、そんな簡単に着けさせてくださいって言う値段じゃないし・・・。

店員はそんな私をまったく無視して、彼にネックレスを渡す。彼は私の後ろに回りこみ強引にネックレスを止めた。前に回り私を見て満足そうに言った。

「よく似合ってる、これでいいか?」

いやいやいや、お兄さん値段ちゃんと見てますか?桁見間違えてませんか?

たじろいでいる私に苦笑しながら、店員にプレゼント用でとっている彼がいる。!!!だから!!!桁を見間違えてませんか!!!

そんな私をまったく見ずに店員はここぞとばかりに彼にセールトークを繰り返す。

「実はクリスマス限定で同メーカーから、ネックレスに合わせたリングもございました。」

「へっ???リング?」

「石はダイヤモンドでクオリティももちろん絶対の自信を持ってお勧めできます。単体でエンゲージとしてお買い求めになれる方もいらっしやるんですよ。」

興味深そうに奴は耳を傾ける。現物はあるの?と言う彼の声に(や

めてくれ！！！！）私は逃げ腰になる。

「こちらになります」

逃げようとした私の手をつかみ、彼は引つ張った。店員の出してきたリングを仕方なく見る。うとう、ほんとかわいい、私好みだ。でもエンゲージ？

「サイズ調べられますか？」

いやいやいや、いらないし、しないし、やめて頂戴。彼の台詞に首を振って抵抗して見せたが、俺に恥をかかせるのか？という無言の圧力に屈する。

「まあ、よくお似合いですわ」

いや、やめて頂戴、これを受け取る心の準備が私にはまだない。泣きそうになってる私の顔を見て、彼はため息をつきながら店員に今日はやめときますと言った。取りおきいたしましょうか？と言う店員に貴公子の笑顔を向けながら近いうちに来ますから良いです。と返していた。

ほっとし脱力中の私に彼はため息をつきながら言った。映画始まるよ、行こうか・・・。と

衝撃的なイベントのせいで映画の内容は殆んど覚えてない。夕食どうする？ときいてきた彼の言葉に答えあぐねていると、彼の携帯が鳴った。

「・・・はい、はい、レントゲンとって当直医に診察してもらってください出来れば血液ガスと一般採血も出しておいってください。僕もそちらに向かいます。」

彼は患者さんの血中酸素飽和度が上がらないらしいちょっと病棟に顔を出す夕食はこの次にねといいながら私を軽く引き寄せてほほに唇を寄せる。いやいや公衆の面前だしここ！！思わず身を硬くする私に笑って、じゃあなまっすぐ帰れよと言った。

小走りで横断歩道を渡りひとこみにまぎれていく彼の後姿を私はそ

の背中が見えなくなるまでずっと見送っていた

……ゴメンナサイ……。

引き止めるもの

「それで、私になんと欲しいのかな？」

一人の部屋にかえるのがいやで、都の部屋を訪れた私はことの顛末を都に相談していた。

「……どうしたら良いんだろう？」

「……!! あほかっ!! 都の罵声が部屋に響き渡る。ここは野中の一軒家じゃないんだから、もう少し小さな声で……。そんな私の心の声が聞こえたのか、こちらをにらみつけながら低い声で都は言った。

「あのな、20、21、の小娘が”いや〜ん 彼に意味深なこと言われちゃった〜ん”てのと訳が違うんだよ!! 成人女性のクリスマスなんか、高値になるのはその当日まで!! 年末大売出し中のあんたが、買ってくれる奇特な人をここで見逃したらどうするの？ 我々には、新春大売出しは当てはまらないんだよ!! あんたの後ろはがけっぷちなもの!! 本当にわかっているの？ いいやつ!! いったそのことこのまま腐ってしまえっつ!!」

「……そこまで言わなくても良いじゃない、と心の中でつぶやきつつ、目をそらしながら都に反論する。

「歳末大売出し中なのはあんたも一緒じゃないの……。？」
「きつと、こちらをにらみつける都におびえて小さくなる。」

「歳末じゃない!! 年末!! 私は今は結婚する気がないからいいの!!」
「……」
分かったような分からないようなどっちでも良いようなよくないような、訳の分からない都の怒りに、私が悪うございましたと謝ってみる。

「ほんとに?! ほんとに悪いと思ってる?! なら! 奴に今すぐ電話して指輪が欲しいと言ってみる!!」

いやいや、その話 論点ちよつとずれてるし……。

「ずれてない！！でなかったら、奴が次に行けるように切ってますっ！！男は30からだって言うけれど、アイツは32じゃないか！！足掛け7年も振り回せば充分でしょう?！」

「でも付き合ってたまだ半年だし……。」

「阿呆！！だから、自分が歳末大売出し中の身分だつて言う事忘れるな！！時間は止まってくれないんだこうしてる間にも刻々と過ぎていくんだつっ！！ぐずぐず言ってる場合じゃないって！！！」

「……年末じゃなかったの？やっぱどっちでもいいんじゃない……。」
「うるさいわ！！！」

何で私の心の声が都には聞こえるんだろうという、私の驚いた顔に都は、あんたの考えなんて顔を見たらただ漏れ出し……、とため息をついた。

「……別れることは、考えてないんでしょう?」

都の言葉に私は返事が出来なかった。でも、このままじゃいけないことも分かっていた。

「けじめは……、つけないとね。」

都は、びっくりした目で私を見つめ、そしてため息をつきながら首を振った。

そして、その後私たちの間でそのことに対するそれ以上の会話は無かった。

翌日、都が会議から詰所に戻ると、ヘタレの友人の、ヘタレの彼氏が、ヘタレながら電子カルテに所見を打ち込んでいた。他に人影は無い、音を立てずにそつと後ろに立ち首に両手をかけた。びくつと肩が動き恐る恐る後ろを振り向く彼を見ていた。

「……おまえ、それ、何の合図だ?」

横に腰掛けて周りを見回しながら、あなたに心情を表してみました。と都は笑いながら言った。そして続けた。

「聞いて欲しいことがあるなら夕食で手を打つわよ？」

「・・・ああ、とカルテを見ながら彼は答える。

「昨日の今日で情報早いな？」

「だってテレパシーでつながってるもん。という都の台詞をスルーして彼は、30分後西口駐車場と答える。

「いや！正面玄関に迎えに来て。・・・という都の台詞に、お前どの女王様だよ？　じゃあ40分後正面など、キーボードを叩きながら返す。

詰所の入り口から美香が車椅子のちいちゃんを連れて入ってきた。美香は今日は準深夜だ、それを見ながら都は少しあんたのへたれた彼氏借りるねと心の中でつぶやいた。

「うわ〜懐かしい車。まだこんなのに乗ってたんだ!!」

ぼろぼろの緑の軽自動車を見て都が声を上げた。

「・・・車まで手が回らなかったんだよ・・・。」

新婚用のマンション買ったものね？と都が茶化すように言った。

「・・・それに、買い換えるにしても、普通車にするか、ワンボックスにするか、悩んでいたし・・・。」

「・・・だって家族が増えたら必要な仕様が代わるだろう？　と続いた彼の台詞に、あんたって本当にけなげね。と都がつぶやいた。それなのに、あの年末大売出しは・・・。とボソリ。

「指輪は婚約指輪のつもりだったの？それとも単なるプレゼント？」

「・・・この年で、あの年で、いまさらだろう？」

という彼の答えに、そうでしょうね・・・と都がつぶやく。

「まさか・・・解ってないわけじゃないよな？あいつ・・・？」

い〜え、いやというほど理解してましたよ・・・との都の答えに、それはそれで、へこむよな・・・。とかれは答える。

「16年たす12年」

「・・・？」

あの子は16年優しいお兄ちゃんに”大事な大好きな美香”をすり込まれ、死んだ後も幻を見せられ続けたの。」

「・・・それに対して、ただか半年の俺は分が悪すぎるってか？そうはいってないけれど・・・でもあの強力なすり込みは手ごわいと思うわよ・・・とやなことを言う。」

「美香は、優ちゃんごとくで美香なのよね」
意味がわからず、顔をしかめた。

「美香は美香だろう？亡霊が何を出来るんだ？」

あきれた顔で、都は俺の顔を見た。

「患者さんに対しては、気持ちを汲むのが上手なのに、当事者になると全然ね・・・それとも、嫉妬に目がくらんで目の前で何が起きているかも見えなくなってるの？」

俺はいらいらしながら返した。

「何の事だ？」

都は淡々と続けた。あんたのキャパシティの広さに期待するわ・・・と。

「はじめをつけたいっていつてたわ」

「それは？・・・何に対して・・・？、誰に対してだ？」

さあ・・・それが分からないから困ってるのよね・・・と都は言った。

・・・ほんとに分が悪い、亡霊とどうやって張り合えというんだろ
うか・・・。

もうすぐ新しい年が来ようとしているのに、彼女と俺の時間はまた動かなくなつた。

亡霊の後姿

彼は、年末年始奴、殆んど休みをとらずに働いていた。急変対応、病棟の当直、内科外来当直をこなし、ERの当直を押し付けられて、殆んどマンションには帰れず病院に寝泊りしているようだった。今までは、逢えなくても気になってマンションに通い食料を補充していたが、あのクリスマス事件以来、私の足は遠のいていた。このままじゃいけないと思いつつも、答えを用意出来ないままで逢うのが怖かった。

昼休憩を取っていると彼からメールが来た、今日は早く帰れるので、逢えないか・・・と。マンションで待っているとメールを返した。

「久しぶり。」
リビングでいきなり抱きしめられた。

「ああ、美香のにおいだ・・・。逢いたかった・・・。」
抱きしめてきた彼の吐息が、肩と首にかかった。

「3週間ぶりだっけ？そういえば、クリスマスにプレゼント渡してから逢ってないね。」

そういえば、私はプレゼントも渡してない・・・。
いつも、食事をつくってもらってるからいいよという彼の笑顔に、それも最近していなかった私は下を向いてしまった。そんな私を見て。

「げんきだった？・・・って職場で顔をあわせてるし知ってるよね。」

一人でぼけて、会話の糸口をさがしていた。

・・・ケジメヲツケナイトイケナイ・・・。

言葉少ない夕食が終わり、彼が口を開いた。

「明日から実家に帰るんだろう？休みが取れたから、俺も一緒に行くわ。」

「・・・え？」

「休みとつたんだ・・・俺も3連休、ついでに温泉に寄ってゆつくりする？それともどこか行きたい所ある？」

リクエストに答えるよ？と笑いながらこちらを覗きこんでいる。

「・・・だめ・・・。」

「・・・え？」

「・・・駄目。」

なんで？と私を見る。・・・シセンガ、ツキササル。・・・

「・・・一緒に来て欲しくない。・・・まだ会って欲しくない。」

視線をそらし、黙り込んでいる私になんで？・・・と聞く。

答えられない、私の気持ちをなんて伝えればいいんだろう・・・。

「あなたの事は好きよ。大事にしたいと思ってる。でも私には忘れられない人がいる。」

彼が、言葉をつなげる。

「別に忘れなくても良いよ・・・。」

私は彼を見据えて言った、

「優ちゃんのことを私が思い出しているときに、あなたがどんな顔をしているか知ってる？」

答えられずに黙って、彼はでていった。

2時の巡視を終え都が詰所に入ると、明日から3連休で彼女と旅行

に行くはずの彼が電子カルテの画面をにらみつけていた。

「何やっての？明日早いんじゃないの？」

「……………」

「美香の家に挨拶にいくって言っていたじゃないの？」

「そのつもりだっけけれど…………断られた。」

何言ってるんだろう…………あの年末大売出しは…………。それで、部屋にいられないから職場に来るなんて、あなたの行動範囲ってどうなのよ？と都はいった。

「…………あんたもね、こんなところでへたれてる場合じゃないでしょう！？追いかけて、押しかけて、宣言すればいいのよ！！お前は俺のもんだって。！」

「うるさい！それでは手にはいるなら、とっくにしている！」

見たこともない彼の剣幕に都がひるんだ。

「6年待った、ずっと見てきた。やっと手にはいったと思ったのに心が見えないんだ！！」

巡視から戻ったほかの看護師が遠巻きに眺めている、ここは職場だ、こんな話をする場所ではない、しまった。

「寝てきたら？ずっと寝てないんでしょう？」

「…………すまない、大きな声を上げて…………。他の看護師にも聞こえるように言っただけは出て行った。」

その後彼を、院内で見かけることはなかった。

院内の仮眠室で夜を過ごし、朝マンションに彼は帰った。

やっぱり一緒に帰ろうか、とはにかむ恋人の姿に少し期待しながら…………。

でも彼を待っていたのは”ごめん”とかかれた1枚の書き置きだ

けだった。

「・・・はじめ・・・か。」

都から聞いたあいつの言葉。あいつはは どうして、頑なに一緒になることを拒むんだろう・・・。婚約者がいたぐらいだ、別に結婚しないことにこだわっているわけでは無いだろう。

「むりさせてるのか・・・な？」

無理やり身体を奪って、彼女の優しさに付け込んで、その後ずるずる関係を強要している自分がいるのかもしれない。自分のわがままをこれ以上あいつに押し付ける前に、はじめをつけるのは俺のほうかも知れない。

「・・・はじめ、つけられるかな？」

美香のお気に入りのクッションにもたれて、美香のにおいを探している、情けない自分をわらっていた・・・。

亡霊の後姿と 遺されたもの

美香が帰って来る日、部屋で待っているのがいやで、院内で夜を明かした。

翌日、マンションに帰ると美香が来ていた。お土産あるよ。．．．とまぶしい笑顔で、迎えてくれた。何事もなかったように．．．

「．．．．．きてんだ。」
「ご飯にする？お風呂沸いてるよ？とこだわりのなかったころのように声がかかる。」

「．．．．．話がある、座って聞いて。」
声が硬くなるのが分かる、でも今言わないと、このまま一緒にすくしたらもういえなくなってしまう自分が分かっていた。

．．．．．しいぞうがいたい．．．．．

なに？と心配そうな顔で聞かれた。

「．．．．．鍵、返して欲しいんだ。」

「．．．．．え？」

びっくりとしたためがこちらを覗き込む。それは、別れたってこと？彼女のかすれた声が耳に響いた．．．。

．．．．．いきがくるしい．．．．．

「亡霊とは、もうはりあえない．．．。」

彼女はうつむいたままだ。

「いつかは手にはいると思って、6年ずっと追いかけてきた……。やっと半年前に手にはいったとおもったのに心はそこになかったんだ……。こんなことならただ見つめていただけのほうがまだ良かった、苦しくてたまらない、もう疲れたよ。」

「……………」

「どれだけががんばっても俺は一番にはなれない。大きな壁が邪魔して君に触れている実感がないんだ。もう俺には無理だ」

「いま、好きなのはあなただけよ……。」

俺は首を振った、

「生きてる人間のなかで……。？ 君の中の亡霊と張り合っても勝ち目がないだろう？。おれは、君の中で永遠に一番ではないだろう？。いつまで僕は彼の後姿を気にしないといけないんだ？。・それが俺にはもう耐えられないんだ。」

私の中から優ちゃんの記憶は消せないわ……。と彼女はいった。それは無理……。と。

俺は、平行線だな、と言った。

彼女が亡霊を優先させる限り僕はどうかあがいても一番にはなれない。亡霊と張り合うなんて分が悪すぎる。

いつの間にか、ひざを抱えて俺は円くなっていた。……。

「たのむ……、早く出て行ってくれ。」

「……今までごめんね、……ありがとう、さよなら。」

ドアの音が聞こえた、あいつが出て行った音だ。顔を上げられずにどのくらい過ぎただろう……。

テーブルの上に、鍵を置いてへやをでた。

部屋を出る前に、いつの間にかひざを抱えて、円くなっている彼を見ていた。ああいつか見た光景だ。あの時は、私が抱きしめて暖めてあげたのに……。もう彼はそれを望んでいない。

きっと誰か他の人に暖めてもらうのだろう……。

彼が、私の中の優ちゃんの記憶を否定する限り、彼とは一緒にいられない。仕方ないことなんだろう。でも、

イキガデキナイ……。シンゾウガイタイ……。

あの出来事から、数日がたった。私の感情とは関係なく、何事もなかったように日々は過ぎていった。都にはちゃんと話し合ったらと言われて何度かメールしようと思ったが、何をどう伝えればいいのかわからない。優ちゃんとの思い出はなくなりたいし、それが邪魔であるといわれれば、きっと終わりにするしかないのだからうとやっぱり思う。

つらくても、足元が崩れるような思いをしても、仕事はしないといけない。

夜勤中にナースコールがなった。ちいちゃんだ。

「…………くるしい…………しんどい…………」

訪床すると小さな声で訴える。最近ADLも下がり、ベッド上の生活になっていた。

血圧はやや低く、脈が弱くて遅い、血中酸素飽和度も低い。ルーテイン指示の酸素を投与し12ECGをとって当直医をコールした。「う〜ん、どこかといってどうとは…………。年だし、びょうきがびょうきだしなあ…………。貧血が進んでるし、しんどいのはそのせいどころし…………。」

歯切れが悪い…………、時計を見ると23時、主治医を呼ぶか？

一応、主治医に報告します。と、当直医に断り主治医に電話をした。5コールで奴が出て、返事をした耳元で聞こえる久しぶりの声…………。

「西5病棟の看護師の中野です。」

「……………何か？」

「江端さんが、全身倦怠感を訴えられて……………」

状況報告をつづける。後ろで、日置先生どうされたんですか？という女性の声が聞こえる…………？電話の向こうで、患者の状況が変わったので今から顔を出します夕食御馳走様でした、と言う声が聞こ

える……。夕食？……。

「今出先で一時間かかる。当直の先生と代わってくれますか？」

当直医にその旨を伝え電話を代わる。一時間？彼のマンションはここから車で10分……。どこにいるんだらう？

電話を切った当直医が、私の名前を呼んでるのにきずかなかった。われに振り返り顔を上げる。

「一時間で来るって言うてるし、今までの指示どつりで。維持液でルートとってキープで流して」

「分かりました」

おかしくなったら何時でも読んでくださいね……。と当直医は出て行った。

ちいちゃんの部屋を、詰所の横の処置室に移す。部屋を移動するならしょうとう台の缶も持って行くとつう。指示どつり四角い缶を乗せて。ベッドを移動する。

消灯後なので、仕事は記録の整理のみだ。ちいちゃんのベッドサイドに座つて、手を握つた。

「しんどいとこさするうか？」

「いらぬ、こつやつていてくれるだけでいい、仕事はええんか？あと記録だけだし大丈夫。つて言うとにつこり笑つ。

「真一さんとけんかしたんか？」

あいまいに返事をした。

「アノ人は、頑固ものだしな、わがままだし独占欲も強いし、彼女になつたら苦勞するだらうな？」

そつなの？とびっくりしてみる。

そりゃあなた、見てれば分かるよ……。伊達に年はとつてない……。とにつこり笑い、

「でも純粹で、一所懸命だ、だから融通が利かない。いろんなことを抱え込んで自分で処理しようとしてパンクする。」

目を見開いて見ている私に、ちいちゃんがウインクする。

「だからあんたみたいに、三本ぐらい線が切れて抜けてるのが、良いんだ。」

「……それほめてますか？ちいちゃん。」

「お似合いだと思うよ、手を離しちゃイカンよ？」

仕方ないし譲ったあげよう・・・と笑いながら続けた。

「……デモ、モウオシマイニスタンデス。……」

うつむいている私のほほに手を当ててちいちゃんは続けていった。

「あんたは、幸せにならないといけないよ。でないと、あんたを置いていった人は天国でゆっくり出来ない、わたしも、あんたには幸せになつて欲しい。」

そして静かに涙を流し、ごめんねといった。

ごめんね？謝られることなんてされてない。何のことだろうと怪訝な顔をしている私に、もう大丈夫だから、仕事をしてきて私は少し寝るといって目を閉じた。

主治医であるあいつが来た。ちいちゃんのベッドサイドに行き少し話をする。そして、相談室で家族と話し合っていた。詰所に帰ってきて、カルテに指示を記入した。

” D N A R ”

「……え？」

「……本人家族の希望。今回入院のときに言われた。今もう一度確認したけれど、同じ答え。点滴抜いて、モニターはずして。」

「……出来ません。」

「じゃあ、自分でするからいい。」

椅子から立ち上がり、ちいちゃんのベッドサイドに行こうとする、

彼の腕をつかむ。

「何でそんな事言うの？まだ生きられる。」

「……その感情は、山下さんの息子の思いとどっちがうの？それとも看護師の君に江端さんの病状説明をして、人間の寿命について、考えてもらわないといけないの？」

そんなひどいこと言わないで！！だって、ちいちゃんは、私が就職したときからずっと入退院を繰り返して……。私にとって一番印象深くって、一番大切な人なのに……。自分の心の声を省みて愕然とする。本当に、私は、誰のためにちいちゃんの延命を望んでいるのだろうか。私が寂しいからちいちゃんに生きて欲しいんだろうか……。そんな、私の顔を見て彼は続けた。

「人間の生死は神様が決めるものだ。僕らが操作できるものではない。人生の引き際を決めるのは、本人の意味だ。周りの思惑で振り回すものでもない。」

ゆっくりと彼の言葉を噛締める。そうだ、その言葉を12年前に誰かに言って欲しかった。

ちいちゃんの方へ歩こうとしている奴を引き止めた。

「私が行きます。」ちいちゃんのベッドサイドへ向かった。

小さく、苦しそうな息をしている。私の泣きそうになってる表情に気づき ちいちゃんは少し笑って言った。

「人間引き際が肝心。あなたの幸せな姿を見るまでは、とおもったけれども、もう限界だ。真一さんというパートナーを譲ったし、そろそろ退散させてもらえるか？」

涙が出る、

「……誰もが行く道だ、泣くことではないよ？……必ず幸せになつてね。」
答えられず、点滴と、モニターをはずしたあと、家族に一礼をして部屋を出た。

その日の明け方、家族に見守られてちいちゃんは息を引き取った。

お体を拭いて、寝台車の到着を待った。寝台車の職員に連れられていくちいちゃんを病院出口までお見送りするためにエレベーターで一緒に降りる。

寝台車の前にいる男の人が私の顔を見て涙を流しながら、深くお辞儀をしてきた。

「……？ちいちゃんのお孫さん？どこかで見た顔だ……ずっと昔……」

「……シンゾウガイタイ……ヤナオモイデガヨミガエル……」

その男の人は、私が近づくといった。

「お久しぶりです。祖母がお世話になりました、
そして……と続ける。」

「本当に申し訳ございませんでした。」
びっくりして、ちいちゃんのお孫さんとお嫁さんを振り返る。

「黙っていて申し訳ございませんでした。」

「……オモイダシタクナイ……デモワスレラナイ……」

優ちゃんの、お墓でゴメンナサイとずっと謝っていた、アノ子だ。

私はうつむいたまま言葉を搾り出す。声がかすれた。

「……いつ気づかれたんですか？」

「私たちの参列はお断りされたので、告別式に祖母がこっそり、参列させていただいてました。そのときお顔を覚えていたようです、自分が通っている病院に中野さんが就職されたときには、非常に驚いていました。偶然ってあるんですね。」

・・・・・・・・キキタクナイ・・・・・・・・

「自分の侵した罪を考えると、謝って許されることではないと思います。でも、もう一度きちんと謝りたかった。祖母には、あなたに知れたら自分が病院に通えなくなる、あなたを見守れなくなるから、来るなど言われてました。」

青年が土下座した、

「本当に申し訳ございませんでした。」

頭を地面につけている人をぼつと見る。「両親も頭を下げている。。。」

12年もたっているのに、まだ終わってない。。。

「お酒・・・好きですか？」

あれから飲んでません、と声がした。。。

「許す、とはいえません。」

きつぱりとした口調で、目の前の彼を見据えて私は答えた。

「でも、私も同罪なんですよ？」

びっくりとして、顔を上げる彼に焦点が合わない視線を向ける。

「あの時、優希さんはメールを打ってたんですよ。」

私は、私が一番忘れたかった事実を話すために、言葉が続ける。

「けんか別れして、すねてる奥さんのご機嫌を取るために・・・・。だからあなたの車に気づくのが遅れたんです。」

・・・え？・・・と言う声が聞こえる。

「遺品の、携帯電話が打ちかけのメール画面でした。」

忘れられないあのメールの内容。

”美香まだ怒ってるの？いい加減機嫌直して？愛し”

「だからあなたは悪くないんです。あなたが悪いとすれば、飲酒運転をして、事故を起こした事実だけです」

淡々と続けた。二度としないでください・・・と

「江端さんには、入職してからたくさんのことを教えていただき、とても感謝しております。ご冥福をお祈りしています。」

静かに頭を下げる。彼らはそれ以上何も言わずうなだれていた。

寝台車が校外を出て見えなくなるまで見送った。ゆつくりと振り返り、ドアを開けようとするが力がはいらぬ。ああ・・・、だからごめんね、なんだ・・・、幸せになつて欲しいなんだ・・・。その場に座り込んだ、涙が出てきた・・・。

「・・・美香・・・。」

彼の手が私の肩にかかる・・・。

「触らないで！！！」思わず声を上げた。

「触つて欲しくない！！！！　ほんとは、あいつが死ねばよかったのよ、優ちゃんにぶつかる前に、木にでも激突すればよかったんだわ。そしたら、優ちゃんは今も美香の横にいてくれたのよ！！　ずっとそばにいられたの！！　美香をおいて優ちゃんは死んじゃったのに、　何で優ちゃんを殺したあいつがここにいの！！！！」

「・・・違う、責任転嫁だわ、美香が悪いの。旅行に行こうって言われたのに断らなければよかったのよ。喧嘩なんかしなければ、メルを私に打つこともなかったのに、そしたら、車をよけられたの！！！！」

「・・・ソウダ、ワタシガコロシタンダ・・・」

「…………一人にして、あなたじゃないの、あなたじゃ駄目なの。
」
わかった、とつぶやいて離れていく気配がした…………。

病棟に戻った私の顔を見て、日勤の都が苦笑いした。……あなた、患者さんにいちいち感情移入していたら、仕事にならないわよ……と。

わたしは、そうね……と答えた。向かいで、あいつは黙って聞いている。

いまは、ちいちゃんのご冥福を祈ろう。

生理がこない。今までも夜勤のストレスから、遅れることはたびたびあったが3週間も遅れるのは珍しい。……まさか……？いやな予感が頭をよぎる。

避妊、彼はしてくれなかった。出来たら生めば良いから……と、私の話を聞いてくれなかった。いまさらながらに自分の体の管理を人任せにしていたことを後悔する。

検査薬を買って、確認した。

…………ヨウセイダ…………ドウシヨウ…………
彼にだけは、知られたくない。きつと責任を取ると言うに決まっている。義務感で結婚して欲しくない。それに、優ちゃんとの思い出を否定する人と結婚できない。

どうすればいいんだろう、多分今3ヶ月か4ヶ月目にはいったところか？何ヶ月までごまかせるか？今やめたいといったらやめられるか??

答えは見えない、ぐるぐると同じ考えが、頭をまわっていた。

亡霊の後姿と 遭されたもの（後書き）

”DNAR” Do Not Attempt Resuscitation（蘇生を試みないください）

リビング・ウィルと同じような意味合いです。

亡霊と現実と（前書き）

暴力シーンあります。

亡霊と現実と

「あんだ最近調子悪そうね？」

都が私の顔を覗き込んで、心配そうに言った。

「・・・いろいろあつたから。」

私の答えに、そうよね・・・とだまる。それ以上聞いてこない彼女にほつとする。

どうするのか、決めきれないまま時間はたつていった。あの人のことだ、他人から聞いたら、きっと傷つくだろう。そして私の話を冷静に聞かず責任を取ると言い出すだろう、その事態だけは避けたい。一度話さなければ。私の口から伝えなければ。婦人科も早く受診しなければ・・・。気持ちはあせるが何一つとして具体的に進ませられない自分がいた。

・・・ワタシハホントウハドウシタインダロウ・・・

メールアドレスと、プライベートの電話番号は消去していた。

それに、私からだと言ったら出ないかもしれない。確実に会える方法を考えて、マンションの前で、彼の帰りを待った。

最近お腹が鈍く痛む。今日はそれがひどい・・・。どんどん強くなる痛みに分分まで悪くなる。どうなっているんだろう？おかしい・・・。周りの景色が暗くなった。

・・・ユウチャン、タスケテ、ミカオナカガイタイ・・・

病棟当直、ER当直、オンコールをこなし忙しさに埋もれていた。何も考えたくなかった。

ほぼ一月ろくに寝ず仕事をこなし、さすがに疲れたので、今日は帰宅する旨を伝えるために、ER担当の同期の山本のもとを訪れた。

「今日は帰るわ、呼んでもでないぞ。」

「帰らなければ、俺が言おうと思っていた。」よく休めよ・・・とつながる言葉にかぶせるように、ホットラインになる。

山本が受話器を取る、隣の電話のスピーカーをオンにして、救急隊との会話を聞く。

「20〜30代女性。マンションの前でうずくまっているのを住人が発見。目だった外傷は認められませんが、外陰部より出血があります。腹部圧痛あり、腹部のぼうまん。頭骨動脈触知弱く、顔面蒼白、ショック状態です。バイタルは脈拍120回/分、血圧触診80・・・5分で到着」

電話を取った山本が、取れそうならルートとって、急性腹症の原因が分からないので、輸液は、とうこつが触れる程度で生食で行って・・・と指示を出すのを聞いていた。住所は俺のマンションだ。

「帰りそびれたな？」

と笑う友人に、仕方ないよ、と返す。若い女性だよね外妊破裂だったらいやだな？と苦笑いしながら軽口を叩く。

行ってる間に、救急車が到着する。同僚が患者の様子を見ようと前に出て救急車の中を覗き込む。救急車から出てきたストレッチャーから真っ白の手が覗く。状態が悪そうだ・・・やばいな・・・

「・・・！！日置！！！！」

山本の怒鳴り声が聞こえる、救急車から出てきた患者の顔が見えた。

「っつ！！美香！！！！」

愕然とした、なんで？どうして？応援要請している山本の大声が響

く。

「日置！！見に覚えは！！！」

「……ある……」

電話の向こうに、急性腹症、腹腔内出血の疑い。外妊破裂の可能性強いギネの医者呼んで！オペ室手配して、血液用意しろ・・と怒鳴ってるのが聞こえた。啞然と立ちすくむ俺に罵声が飛ぶ。

「輸液負荷でも血圧上がらない！！お前は医者か、単なる身内か！邪魔するなら出て行け！！」

そつかん準備して！介助よろしくお願いします。 ERの看護師に叫ぶと同時に体が動いていた。

オペ室に搬入し、山本に手をつかまれ、OPE見学用の部屋に連れて行かれる。OPEの様子をモニターで見ながら、彼は、ひどいな・・と顔をしかめながらつぶやいていた。怖くて見る事が出来ない。

「……避妊してなかったのか？」

「出来たら、結婚できると、手にはいると思ってわざとしなかった。」

「……お前最低だね、とつぶやく声が聞こえる。本当に最低だ。」

「……別れたって聞いたけど……？」

「……俺から別れ話した、元婚約者に嫉妬して……。」
本当に最低、救いようがないね……。と言う呟きが聞こえる……。
これが原因で美香が死んだらどうしたら良いんだろう。

美香が死ぬ？永遠に失うかもしれない、ありえない……。
別れを決めたときと違った感情が心の中を駆け巡った。

「美香がいなくなったらどうしよう……」

俺のつぶやきに、こちらにびっくりした目を向けて、考える。と彼は静かに言った。

美香が、死んだら俺のせいだ。自分のわがままで、無理やり美香

を自分のものにして、自分のキャパシティの問題ではなれた。頭を抱えてうずくまる俺に、山本は静かに言った。

「美香ちゃんは、自分のせいで婚約者が死んだと思っっているんだろう？ 誰かが、自分の責任で死んだなんて感情を引きずって生きていくなんで、きついよな。その気持ち、無理やりにこっちに向けて、忘れられないものを忘れろと強要して、拳銃、してくれないと切つて捨てたのか？ まさか、避妊もしてないとはな？ もし別れた後に出ていたら、だれが育てたんだ？ 美香ちゃんの性格だと墮ろすなんて考えないだろう。」

たとえ産んだとしても、そんなキャパの狭い男と生活も出来ないだろう？

・・・親友の、容赦ない言葉を聴きながら、俺は打ちひしがれていた。

「お前の独占欲は、亡霊にまで発揮されてたんだよな？ 美香ちゃんはお前に合いに行ったんだろうな。これからお前はどうするんだ？」

「今度手を出すときは、美香ちゃんのすべてを受け止める覚悟決めるよ・・・？」

自分の、狭量さがいやになる。美香が死んだら俺はゼツタイ自分を許せないだろう。美香もこんな思いを抱えながら、それでも俺のほうを向いていてくれたのか・・・。

いまさらのように、自分に対する美香の愛情を思い知る。

「山本先生」

ERの看護師がそつとこちらの様子を伺いながら、言った。

「患者さんのご家族のかたがお見えです。どうしましょうか？」

ありがとう、僕が話をするよ。山本は告げると、待合室に向かおうとした。

「……一緒にいっても良いか？」

俺の言葉に彼は、ああ、初療にかかわってくれたしな……とこちらをちらりと見て言った。

待合室隣の面談室には、中年の夫婦らしき人が二組いた。白衣を見て背の高い痩せた男性が近づいてきた。

「父親ですが、娘の様子はどうなんでしょうか？」

山本が、自己紹介の後、到着時の様子、現在の状況、今後の予測されることを簡単に述べた後、詳しくは、婦人科の執刀医からもう一度ある旨伝える。少し背の低い小太りの男性がじつと俺のほうを伺っていた。

「こちらの先生は？」

山本が初療と一緒に担当してくれた医師である旨伝えてくれた。その後、俺は告げた。

「……日置といいます。美香さんと親しくさせていただいてました。申し訳ございませんでした。」

いい終わるか終わらないかの内に、こちらの様子をじつと伺っていた小太りの男性が殴りかかってきた。

「おまえか、美香をこんな目にあわせたのは……！美香から全部聞いている。結婚して良いかといいに来てたのに、何ですぐ別れるんだよ……！しかもこんなことまで起こしやがって……！最後まで責任が取れないのなら、中途半端に手を出すな……！僕たちはすでに息子をなくしているんだ。もうこれ以上、もって行かれないんだ。」
泣きながら、のしかかられ殴られるままになっていた。抵抗なんて出来なかった。

ふっと、体が軽くなり目を開けると、男性はもう一人の人に。押

さえられていた。

「初療対応ありがとうございました。」

その男性は、小太りの男性を後ろから羽交い絞めにしつつ、こちらを見ながら言った。

「甥が救急医だったので、救急での初期治療が命の予後を決める大切なものだと聞いていました。感謝しています。ただ、父親としては、美香に今後近づかないでいただきたいとお伝えしたい。こうなったのは、あなただけの責任でないことは分かっています。美香の自己管理が悪かったのでしょうか。ただ、あなたの男としての行動は、親として、同姓として許せない。」

山本に手術が終わるまでどこで待たせていただければ良いですか？とその男性はきいた後山本に頭を下げ、こちらは見もせず、待合室へと向かっていった。

「相手が、刃物持ってなくてよかったですな？」

「………いつそその方がよかったですよ」

救急外来で、あきれた顔でこちらを見ながら、山本は俺の手当てをしてくれた。

「………かなり、腫れるぞこれ……。」

「いいよ、見せしめになるだろう？」

自嘲気味で言う俺に、ため息をつきつつまあ自分の尻は自分で拭かないとな？冷やせよ。といい残し山本は仕事に戻っていった。

美香のことが気になったが、あの場所に戻ってオペを見学するのが怖くて出来ない、自分の中途半端さに自分自身であきれながら、ICUの医師控え室へ向かった。

亡霊と現実と（後書き）

救急隊と医師が直接話が出来るかどうかは、その施設、地域、によつて異なります。

・・あくまでも、物語と違って読んでいただけると幸いです。

また、医療関係の表現に関しては突っ込みどころも（かなり）あるとは思いますが、こちらも、あくまでも物語としてごらんになっていただけると幸いです。

（一応調べてはおりますが・・・。）

登場する医師、看護師の勤務体制も、（物語の一環として）現実とは少し異なります。

明日のためのいま

「日置先生どうされたんですか？」

指導中の山崎医師が声をかけてきた。今年入職したての彼女の指導を現在任されている。まわりの、事情を知っているらしき医師が息を潜めてこちらを伺っているのが分かる。

「急外でかかわった患者が、ICUに入る予定だからここで待とう
と思つて。」

「先生、私が言っているのはその顔のことです。冷やさないと・・・」

彼女の手を振り切つて、奥に設置されているソファ―に座り込んだ。僕の拒否にあいそれ以上彼女も何も言つてこなかった。

時間が過ぎるのが遅すぎる、オペはまだ終わらないのか、という不安とともに、美香の強さを信じたいという思い、彼女が死んだらどうしようという思いがぐるぐると自分の中を駆け巡る。

どのくらい時間がたっただろう。婦人科の同期の医師が僕を探して来た。

「日置、喋れるか？」

人の少ない場所に移動する

「出血量は3000～4000ml、左の卵管破裂、右は異常ない
ただ、」

「どうも、出血が始まってから、しばらく放置されていたらしく、
全身状態が悪い。レベルも改善が見られないし・・・困っている。
今のお前に発言権・・・無いよな・・・？」

発言どころか、面会も拒否されるだろう、情けない。

「あとは、神様の領域だ・・・。すまん。大丈夫とはいってやれ
なくて。」

控え室で待つしかないか？戻ろうとした俺に誰かが声をかけた、振り向くと都がいた。

「何で、こんなことに・・・。」

「ごめん、と俺がつぶやくと都は答えた。

「あんただけのせいじゃないって、無責任にたきつけた私も悪い。」
このまま美香が戻らなかつたら私たちはお互いを一生許せないわね。
・・・頭を抱えながら都が言つのを聞いていた。

気がつけば、夜も更けていた、医師控え室に詰めている医師の数も減ってみんなそれぞれの場所に散っていく。ソファーにもたれてICU内にいくことも出来ず。帰ることも出来ないで俺はじっとしていた。

「日置先生？」

声をかけられて顔を上げるとICUの師長が見えた。

「家族の方は帰られました。逢っていかれますか？」

病状が不安定な担当患者がICU入室してる時に、話を良くしていたため、それなりに親しい。僕の事情もうわさもしているようだ。
「・・・入ってもいいんですか？」

「先生は、ここのお医者さんでしょうか？初療にかかわった患者さんのフォローをお願いします。」

美香の寝ているベッドに近づいて彼女を見た。状態が安定しているとはいえ、皮膚色は青白い、寝ている様に見えるが、レベルが戻らないのが心配と担当医が言っていた・・・。

俺はゆっくりとベッドに近づいた、そしてベッドサイドにひざまずき美香の手をそつと握り、その手を自分の頬に近づけて美香の体温を感じた。そしてその手を自分の唇に近づけた。

「・・・ゆうちゃん・・・？」

美香がぼつとした目でこちらを見て微笑んだ。俺は声がでなかった。
・黙って美香を見つめていると彼女はうわごとを続けた、薬の影響か、ろれつも回っていない。

「美香ね、とつても怖い夢を見たの、ゆうやんが死んじゃう夢・・・
。おかしいよね？美香おいてさきに死なないって約束したもののね？
？ちゃんと籍も入れたし、本当のお嫁さんにもしてくれるものね？」

彼女に覆いかぶさり、軽く抱きしめる。

「大変な目にあってるのは美香のほうだよ？僕は何処にもいかない。
ずっとここにいるから安心して、眠りなさい。」

「ゆうちゃん、大好き。何処にも行かないで。ずっと美香を抱きしめていて。いつも怖がってごめん。」

婦長の許可をもらい、その日は朝まで手を握っていた。職権乱用か
もしれないがかまうものか。

それから毎晩彼女の様子を伺いに行き彼女の寝顔を見て帰った。

一般病棟に移って、都にひどく怒られた。2週間もICUにいたなんて・・・。ICUでは状態が悪かったので怒るのを我慢していた
という都の言葉に平謝りに謝った。おまけに、母と叔母に、今度からは必ず相手の男に使ってもらいなさいと四角い箱を渡されて、た
めいきしかでない自分がいた。

「優ちゃんがきてくれたの・・・。」

都が面会に来たときに、何とはなしにいった。

「赤ちゃん産みたかったな・・・。」

ほんで、誰と育てるの？どうするつもりだったの？と都が窓の外を見ながら言う。

「う〜ん、優ちゃんと田舎の病院行こうねって言ってたし、どこか、田舎の診療所でのんびりと・・・。」

現実見るよ？ほんま、優兄ちゃんもちゃんも何であんた置いてったかな？と、都にぶつぶつ言われた。

「うん、だからきつと私が育てられないと思って赤ちゃんつれてつてくれたんだと思う。でもね、その時、美香を抱きしめてくれたもの。温かかったな・・・。」

もう、いいわ・・・私・・・。ゆうちゃんは忘れられないって分かったし、こんなつらい思いもうしたくない」

私は一人で生きていくわ・・・。と私の呟きを都は窓の外を見ながら聞いていた。

赤ちゃん、産んであげたかったな・・・。涙が出てきた・・・。

「3交代要員が、一人欠員。」

「・・・？」

突然の都の、発言に怪訝な目を向ける。

都は真つ赤になって、泣きそうな顔をしながら私に言い放った。

「子宮外妊娠の発生率は、全妊娠の1%」

「・・・？」

「万人に起きるときは起きるのよ！！それよりも、私にとってあんなに働けないのが問題！！いつ復帰できるの？1%の偶然の出来事は出来事。それはもう過去の事実よ！！私たちには人員確保という大きな問題が待っているのよ。早く肉体を治して、復帰して！！それがあんたの使命よ！！！」

都、あんたって相変わらずめちゃくちゃね・・・？感傷にも浸

らせてくれないの……。と笑いながら私が言うと。

「そうよ、当たり前じゃん！！鬼の管理職だもん！！私たちは過去を歩んでんじゃないわ！！未来に向かつてあるいてんのよ！！そして、私にとつて大事なのは、そのことをもって今どうするかだわ」
「わかった！？・・・彼女はすごい捨てるよ、仕事に行くわ！！とドアの向こうに消えていった。

「・・・ありがとう。」ドアの向こうに消えた都につばやいた。

都がドアをでて、詰所に帰ろうとすると、日置が廊下の壁にもたれて座り込んでいた。

「・・・何してんのよ、ヘタレ・・・こんなところで、サボってないですよ？今日のリーダーが明日の検査の指示がまだないって、困っていたわよ。」

「・・・俺のせいだ・・・。」

都は、壁にもたれてうずくまっている、日置の胸倉をつかみ低い声で言った。

「・・・そうよ、あんたのせいだわ・・・。そしてあんたなんか、美香を預けた私のせいでもあるのよ。でもね、もしあんたたちがうまくいっていたとしても今回は1%の確率の出来事だわ、今回のことがなかったって赤ちゃんは生まれてこなかったかもしれない。」

手を離し彼の目を見て都は言った。

「私があなたに希望することは、今度好きな女を抱くときは、結婚してないなら避妊しろって事だけよ。そして、こんなことでうじうじ悩んで終わった過去にこだわるよりも、自分の今すべき事を考えるちゅーんじゃ！！悩むっていうのは、あんたが事実から逃避する

ためにしてるだけじゃないの？」
「ばかたれ！！都是そうはき捨ててさっさといった。」

「……大丈夫か？」

いつの間にか日置の横に立っていた山本が聞いてきた。

「お前の彼女、すごいな……。」頭を抱えながら日置が答えた。

「うん、いつもやり込められている。」苦笑いしながら、山本は日置にかえした。

「でも、あいつの言うことはまっとうだと思っよ。俺たちが生きてるのは、今なんだから……。お前はどうしたいの？」

小さな、掠れた声で日置は山本を見つめながら答えた。

「美香に謝りたい。」

「許されて、終わりにしたいのか？」

美香のネームプレートを見つめながら山本が無表情で聞いた。

「……それでは、単なる自己満足だよな？」

日置は下を向いて再び頭を抱えて山本に答えた。

山本は、ネームプレートから日置に視線を移した。暫くうなだれる

日置を見た後、日置の質問には答えず少し笑って、初期治療した患者の様子を見てくると言い残し、病室に入ってしまった。

日置が美香がその後10日ほどしてから退院し自宅療養すると人づてに日置が聞いたのはその10日後だった。

美香が退院するその日病室の前まで行ったが、結局日置は病室には入ることが出来ずにその場を離れた。

明日のためのいま（後書き）

どなたか存じ上げませんが、お気に入り登録ありがとうございます。
文を書くのも初めてなので 本当は投稿しようかと迷ったのですが、お気に入り登録してくださってるのを見て、続けてかく励みになっております。本当にありがとうございます。

2 / 3 投稿し終わりました。

もし宜しければ、最後まで読んでいただけると嬉しいです。
本当にありがとうございます。

清水澄 拝

明日のための今日 (前書き)

前半、ちょっと重い話です。

明日のための今日

俺が、都と山本に話したいことがあると切り出されたのはそれからしばらくしてだった。人のいないところでとの意向だったので、俺のマンションに二人を呼んだ。都が切り出しだした。

「優兄ちゃんのこと何処まで聞いているの？」

「いとこで、婚約者で、医者……？事故で亡くなったって……。」

「亡くなる時の状況は？」

詳しくは……と俺は首を振った。

今更だとは思っけれど、……と都は語り始めた

「私と美香は高校で知り合ったの。私が美香と出会ったときは、もう優兄ちゃんと婚約していたわ。」

プロポーズは中学のときって聞いてたわ。ほんとは美香が卒業してから結婚する予定だったんだけど、優兄ちゃんが、教授の娘さんに気に入られたみたいで、縁談を断りきれなくて、美香が16になったときにそれを断るために籍を入れたの。」

「……それで、何で何もされてないんだ？」

そりゃ、美香が躊躇してたから……。

優兄ちゃんも男だからね。我慢できなかった見たいで、籍を入れた年の夏休みに強引に旅行を計画したらしいの……美香は行かないって喧嘩してたわ……。卒業まで待つて欲しいって……。馬鹿よね、ついてけば良かったんだ。

泣き顔になった都を、山本が抱き寄せた。

後は知ってるとうりよ、一人で旅行に行った日に、信号待ちをしてた、優兄ちゃんに無免許の飲酒運転が突っ込んで……。

「そしてね、」

都は続けた、「優兄ちゃんは実は3週間生きていたの、多臓器不全で死んでしまうまで。」

救急の受け入れ病院が見つからなくて、初療が遅れて、脳死に近い状態だったらしいわ。

優兄ちゃんはドナーカードを持っていたの、だから、脳死判定をどうするかって話になって……。

でも美香がそれを受け入れられなくて、脳死判定は拒否して延命処置を希望して、あとはおきまりのコースよ……。

……多臓器不全を起こしたけれど、ありとあらゆる手を使って延命していたわ。結果はわかるわよね。

そして、美香は 3週間それをずっと見ていたの。

……手も足もすべてがパンパンに膨らんで、亡くなる時には、面影はなかったわ。それを、16歳のみかは全部見てて、それが全部生きていて欲しいと願った自分のわがままのせいだと思ってるのよ。

「それだけ……じゃないの」
都は続ける。

「お葬式が終わった後に警察が遺品を返してくれたの。」

「中に携帯があって、打ちかけのメールがあって、若い刑事が、そのメールを打っていたから自動車が突っ込んで来るのにきづかなかったんだろって、美香に言ったのよ。」

「メールの文は、美香への謝罪だったわ。」

「それから、美香は変になったの。そのころの彼女の記憶はないと思うわ。」

正気になった彼女が、看護師になると聞いて、びっくりしたわ。

淡々と都は語っているが、その、死に際がどうだったかということ、容易に想像がつく。

「12年たっても終わらないのよ、美香はすべてが自分のせいだと思ってる」

「私は彼女に前を向いて欲しい。でも、私じゃ無理なの。」

「彼の存在を否定する僕でも難しいね……。」

都は、僕をまっすぐ見つめて言った。

「そうよ、あの子の存在は、優兄ちゃんごとよ!!!」

後は自分で決めてと都に言われた。

同じ過ちは繰り返せないから、少し考えたい。……と、俺は返した。

俺の覚悟の問題だ。

暫く休職し。体調の戻った私は元の職場に戻った。

3月がきて新しい年度になるうとしていた。

病棟師長が定年になった。

今日はそのための送別会だ。師長さんの関係者の集まる盛大なものになっている。あまり参加したくなかったが、都に気分転換!!!と誘われて断れなかった。

……会場に、彼はいない……。ほっとした反面、残念に思っている自分に、いやになる。

乾杯と、師長さんの挨拶が済んで時間もたって、ほろ酔い加減で

いい気分になっていた。

最初の席とは少しずつ移動していたが、突然開いていた私の横に、ICUの看護師が座った。

「日置先生と別れたんだってね？」

・・・唐突な、発言に息を呑んだ。顔を見て思い出す、そうだ、しんをすきだつてうわさを聞いたことがある。

「プライベートなことなので。」

私は言葉少なく答えた。都が私の様子に気づき、横に座った彼女を睨んだ。

でも、彼女はまったくひるむことなくつづけた。

「周りをおんなに巻き込んで、ドンだけみなに迷惑かけたと思っ
んのよ？」

子供が流れてよかったわね、なかったことに出来たみたいだし？」

身をすくめながら、黙って聞いていた。都が暴言に切れたようで「あんだ・・・」と低い声を出した。

お世話のなつた師長さんの送別会に参加するために会場に向かった。仕事が終わらず遅れての参加となった。そつと会場に入りふと見ると、以前俺に付き合つて欲しいと言つてきた子が美香に絡んでいるのに気がついた。そつと近づいて話の内容を聞いて俺は、まだ暴言を吐き続ける彼女の後ろにそつと立った。周りが俺に気づき息を潜めていたが当の本人は気づいていない。

そつと耳元に近づいてささやいた。

「それ以上はいわないほうが君のためだよ？」

振り返り、息を呑んで俺を見ている彼女に言葉を続けた。

「君は、勘違いしているみたいだから訂正しておくけれども？美香を俺が振つたのではない、俺が彼女に振られたんだ。無理やりに関係を持つて、避妊して欲しいという美香の申し出を断つたのは俺。だって、子供が出来れば彼女を俺のものに出来ると思つたからね・・・」

？」

でもね、・・・と俺は続けた。

「子供が出来ても、俺は打ち明けられてないし、むしろ別れを切り出された。恥ずかしい話俺もそこまで嫌われてるとは思わなかった。俺が恥ずかしいからこの話は終わりにしてもいいかな？」

につこり微笑みながら、一生懸命言い訳をしようとしている彼女の顔を見ながら続けた。

「それと、恥ずかしい話だが俺は、まだ彼女に未練がある。美香を傷つける人がいたら許さないから覚えておいてくれるかな？」

黙ってうつむいている彼女の横に座っている美香を見た。

「・・・でよう、付き合って・・・？」手をひばって有無を言わずに、店を後にした。

繁華街を抜けて会話のないまま駅に向かって並んで歩いた。お茶でも飲むか？という俺の問いに美香が、公園の自動販売機を指差した。お茶を買い、ベンチに並んで座った。

「久しぶりだね、」

俺の言葉に、ごめん・・・と美香がつける。

「・・・？何か謝られることしたっけ？」

「だって、あれじゃあ全部あなたが悪いみたいじゃないの？」

俺はお茶の缶を銜えながら、事実だから・・・といった。

「でも、妊娠にきずかず、放っていたのは私の責任よ。もっと早い時点できずいていたらこんな大騒ぎにはならなかったわ。」

「でも、君の意向を無視して避妊しなかったのは俺の責任だ。この次のときは気をつけるよ。」

につこり笑って彼女に手を伸ばす僕の手をよけながら、美香が複雑な顔をして続ける。

「この次の人には、そうしてあげて・・・？」宙にういたまま行き場

のなくなった俺の右手をよけながら美香は立ち上がり、そう続けた。俺は、言葉を続けようと美香を見上げた、美香は俺の目を見て言った。

「私の心は私のものなの。優ちゃんは私のそばに生まれた時からずっといてくれた。その想いは何があってもなくならないの。」

・・・だからごめん・・・。お茶ご馳走様。そっぴい残して去っていく彼女を俺は黙って見送るしか出来なかった。

ほんとうにほしいものは・・・？

翌日仕事に行く都が寄ってきた。

「昨日はありがとう、美香を助けてくれて。」

自分が招いた結果だからね。というと、まあそれはそうだけれども、少しは見直したし・・・と続けられた。

「あの後どうしたの？」と都に聞かれた。

「公園で、缶ジュース飲んで別れた。」とカルテを見ながら答えた。なにそれ？あんたたち高校生？というみやこの言葉に、でも俺たちらしいだろう？それに・・・もう終わったんだよ・・・とつなげた俺の言葉に、都はごめん余計なことを聞いたとつぶやいた。

季節が変わった、また夏が来る。一番嫌いな季節だ。優ちゃんがいなくなつた季節だ・・・。

優ちゃんのお墓に今年もひとりでいった。毎年命日には一人でくることがしている。

「花が添えてある・・・？」

早朝に叔父さん達と父が来ている筈だがそれ以外にも誰か来てくれた様だ。おじたちは私が持つて来ることを知っているので花は持参しない。それも、かすみそうにガーベラ、あまりお墓には会わない花が包装紙に包まれている。

「優ちゃんの友達・・・？」

それも、4年目ぐらいまではあつたが、最近はなかつたのに・・・不思議に思いながら、優ちゃんにお願い事を伝えた。

「・・・あのね、知っていると思うけれど、赤ちゃんの位牌を作っ

たの、家に置いてくと母たちが悲しむからここに持ってきたの。一
緒に入れて欲しいんだけど、いいかな？」

何処からか風が吹いて、いいよ、っていつてるように聞こえた。お
墓の前をずらして、位牌を中に入れた。

「いつになるか分からないけれど、美香もここに来るからね。」
しばらく、木のおい感じ、葉音を聞き、景色を楽しんでそこを離
れた。

実家に帰る前に、中野の家を覗いた。

「ただいま。」

玄関を開けて声をかけると、恐る恐るといった感じで、叔母が出て
きた。

「ああ、・・・美香ちゃん誰かに会わなかった？」

「・・・？ううん？・・・そうそう、優ちゃんのお墓にお花が添えて
あったからお部屋に飾ってあげようと思って・・・。」

と言葉を続けようとする叔父がすごい剣幕でできて怒鳴った。

「そんなもん！！捨ててしまえ！！！」

叔父の剣幕に私がひるむ。叔母は「お父さん！！」と叔父を睨んだ。
そして続けた。

「ごめんね、美香ちゃん会いたくない人と会ったものだから。」

誰だろう？こんな叔父さん見たことがない。びっくりしている私を
見て、叔父はわれに返ったように、すまない・・・といい「今年も
泊まってくれるよね。」と優しく言ってくれた。

もちろんそのつもりで来た。私は、戸籍上はこの嫁だ。「晩御飯
は、優の好物と美香ちゃんの好物を作ったのよ。」おばがにっこり
笑って続けた。では、和洋折衷の手巻きすしか、懐かしいメニユ
ーに一人微笑みながら、2階に向かおうとした、

「その花は、もって行かないで。」

おばの言葉にびっくりして立ち止まる。

「お墓のものは、家には持ち込まないものよ・・・？」
そういえば、お供え物はいつも置いてきていた。

「ゴメンナサイ、考えなしだったわ。」

叔母は黙って私から花を受け取ると、叔父に渡していた。叔父は黙って玄関から出て行った。

「美香ちゃん、夕飯は7時でいい？」

2階に上ろうとしている私の背後から声がかかる。

「お願いします。」

振り向いて、私はお願いした。

ひさしぶりにはいる優ちゃんの部屋は、優ちゃんが使っていたときそのままだ。

このベッドでうたたねしている優ちゃんが起きるのを良く隣に座って待っていた。もっとも彼が目ざめてここに押し倒されたのも1度や2度ではない。

「13年目・・・か？」

前に進もうと思った、前に進めるかもと思った、でも、この部屋にあふれる思い出をすべて忘れて前に進みたいとは思わない。

ベッドに横になり、優ちゃんの思い出を抱きしめる。

「美香はどうしたいの？」

優ちゃんが私に話しかけていた、顔は見えないけれど、いつものように後ろから抱きしめてくれている。

「真一君が好きじゃないの？」

何でそんなこというんだろう？優ちゃんが一番なのに。

「僕はもうこの世に存在しないんだよ？ねえ、みか？君がそんなん

じゃ僕はおちおち死んでられないよ?」

「いいもん!!みかは、幽霊でも優ちゃんがいいの。」・・・あれ?今の私って、小学生の身体に見える・・・?

優ちゃんは、私の頭をなでながら言った。

「僕は、美香が小さいときに恋に落ちて、君の幸せだけを祈っていたんだ。僕の存在が君の幸せを脅かすのなら、僕はもう僕 existence を君の中から消してしまいたい。」

やめてそんなこと言うのは!!!

「ゼツタイヤダ、美香は優ちゃんがいいの!!!」

「でも僕はそれを望んでないよ。」ゆつくりと、優ちゃんが背を向けた、追いかけてよとするのに足が動かない。

「やだ!!!!!!」

自分の声で目が覚めた。体がびっしょりぬれている。叔父がびっくりにして飛び込んできた。

「美香!!どうした!!」

「夢を見たの・・・」なきながら説明をした。

「優ちゃんが、意地悪言うの」叔父の胸に顔をうずめた。

「自分の思い出が、美香の幸せの邪魔をするなら、自分は消えるって・・・」

そしたら美香は、一人になっちゃうのに・・・泣きながら続けた。

美香は一人じゃないよ、僕たちがいるよ。叔父はそういいながらずっと髪をなでてくれた。

その大きな手はとても暖かった・・・。

デモワタシノホシイノハコノアタタカサジャ

アナイ

明日はどっち?・・・その1

肌寒い季節になった。

都と久しぶりに親交を深めるべく、私たちは居酒屋にいた。

「・・・んんん」

私を見つめながら都が何か言いたげにしていた。

「なに? 愛の告白? 山本先生に言うわよ?」

そうじゃなくて・・・と言い出した。

「日置先生の最近いいわさを聞かない・・・」

「・・・どうということ?」

んんんといいにくそうに続ける

「変な団体とつながりあるんじゃないかって・・・」

「なんで? と聞くと都はポツリポツリと言い出した

「金曜夜から土日の奴の行動がつかめない、土日の病棟、ER当直にも入らず、かといって院外当直も断って、緊急時に連絡つくけれど、コールバックだし電話対応だし・・・病棟看護師からも不満の声がでてるし・・・最も此処最近担当も減らされてるみたいだけれど・・・ おまけにあのあざ」

あざ・・・? ああそういえば最近月曜はいつも顔にあざを作ってる・・・ 週末治ったかと思ったら、また月曜に増えている。

「それに、月曜はいつも二日酔いだし・・・」

「危ない団体?」

「わからん・・・。美香あんなんか知らない?」

知るわけないでしょう!! と私が声を上げる。

そりゃそうよね、と都が返す。

都に言われて奴の動向を見ていた。

あざは減っているみたいだが相変わらず週末の動向はつかめず、確かに病棟では土日彼を見かけない。ER当直もしてる雰囲気もな
く・・・

動向を知っていそうな彼の友人にそれとなく聞くが、私の顔を見ると皆口を噤むかごまかして逃げる・・・

・・・そらそうだろう・・・別れた恋人に何を語れるのか？私の立場でも聞かれるのはいやだ。でも個人的には心配だった。

もう3ヶ月になる。仕事に支障は出てないんだろうか・・・？いや出ているはずだ、でなければ、都が私に彼のことを聞くはずはない。

肌寒い季節だというのに、公園で酔って寝ているところを職務質問されたりもしているらしいと言っていた。

山本先生も困っているようだ。

でも・・・とふと思った・・・普通に平日夜遅くまで働いて、休みのはずの土日になんかつかめないと言われる・・・。医師ってなんて因果な商売なんだろうね・・・。

でももう、私が心配してあげる理由もないだろう・・・。

世は、ジングルベルの響く季節に突入しようとしていた。

明日はどっち?・・・その2

夜勤で認知のお年寄りの相手をしていた。

ふと、人の気配を感じ入り口を見る。

「よ!! 差し入れ。」

珍しい、土曜日の夜だというのに、日置先生が詰所にきた。

「珍しいじゃない、何しているの?」

「・・・仕事してたら悪いか・・・?」

無然とした表情で答えた彼の顔を見ていたら笑えてきた。

「だって、最近あなた、なんていわれてるか知ってる?」

「週末毎飲み歩いてるろくでもない奴・・・?」

あたり・・・と笑うと、ドーナツもって帰ろうかな?という。いえ

いえ、差し入れはいただきますよ。と箱を受け取った。

休憩室に箱を置きにはいると後から彼が追いかけてきた。

「何か食べに行かないか? 定時に終わる?」

一瞬、返事に困った。

「友人として誘ってるんだけど、そして、心配かけてる週末の事情も聞いて欲しくて。」

「・・・聞いて回ってくれてたんだろ?・・・とこちらを向いてにっこり笑う彼に、どきまぎして拳動不審になる。」

「・・・どんな風に思われたんだろ?・・・。」

暫く思いあぐねたが、週末の動向と聞いて心配だったので意を決した。

「1時過ぎには終わると思う。何処に行ったらいい?」

正面玄関で待つてる・・・と言って彼は出て行った。

仕事を終えて、待ち合わせ場所に向かった。見慣れた軽自動車が止まっている。

助手席側に回って、ドアに手をかけようとしたら中から開けてくれた。

「こなかったらどうしようと思ったよ」

「・・・約束したんだから、そんなことはしません。」本当は、すっぱかそうかと悩んだことは黙ってしよう。

何処に行くの？と言う私の問いに。玄さん・・・と、近所のラーメン屋の名前を言った。

よかったほんとにラーメン屋だ。

こちらを見て、にやっと笑って彼は言った。

「ほっとした？」

私はむっとして、黙って前を見た。

そこは、車で15分のところにある、10人もはいればいっぱいになる小さな店だ。

カウンター席しかなく、端っこに2人で並んで座って注文を伝えた。

店主の勢いのいい掛け声を聞きながら、私は聞いてみた。

「あざ、最近はなくなつたのね？」

水を飲みながら、殴られなくなつたからね・・・と彼が笑う・・・

・・・殴られる？誰にだ？

ああそうそう、これ渡しようと思つて。とポケットから彼は無造作に箱を取り出した。紙で出来た小さな箱だった。

「なにこれ？」

無造作に渡されて、無造作にふたを開けた。

「・・・・・・・・！！！！」声がでなかった。これって！！

「そうそう、去年の今頃、プレゼントしようとして断られた奴。」しれっと2杯目の水を飲みながら言う。・・・こんな、ただの箱

に入れられるような値段じゃなかったぞ？

「残念ながら、返品不可の状態なんだ。」

あつけにとられてる私の左手をつかんで彼はそれをはめた。

「……ちよつとまつて!!!!!!」

にっこり笑って彼は言った。

「待つよ何年でも、僕が君の中野さんの思い出ごと君を愛して行くうって思っているのがわかってもらえるまで。……、いまさらだけれどもね。」

おじさんが、ラーメンを持ってきた。

「冷めるとまずいし食べようか？」平然とラーメンをすする彼に私はあいた口がふさがらなかった。

その後、紳士的に彼はあたしのアパートまで送ってくれた。そして、健全な中学生のように手を振って私を見送ってくれた。

結局、彼の週末の動向は聞きそびれた……。

「……そうきたか……。」

事の顛末を都に話す。彼女は笑い、あきれながら聞いてくれた。

「ラーメン屋でプロポーズね……やるな!!」

「都!!そこ突っ込まなくていいし」

私が怒ると、都はまじめな顔をして言った。

「だって、あんた。奴と二人でちゃんとしたとこ誘われたら行くか？」

それは絶対無い。ラーメン屋で、しかも週末の動向の相談と言われたからいったんだ。

じゃあ奴のたくらみにまんまと乗ったんじゃない。と笑う都を睨みながら。

「そうじゃなくて、私が相談したいのは……」

喋る私の口を人差し指で押さえて彼女は言った。

「いつまで人に甘えてるの?いい加減自分で考えなさい。」

以上終わり、と都はそっぽを向いた。

デモね、そっぽを向きながら続けた。本当に、優にチャンの思い出

ごと愛してくれるなら、あんないい奴いないよね・・・？

それから、私は日置先生に度々食事に誘われた、断りきれず何度か行った。

彼はとても紳士的で、楽しく食事して、会話してそれ以上のことはなく、いつも手を振って私のマンシヨンの前で別れた。

そんなこんなで、3ヶ月が過ぎた、ある日・・・。

「時間あつたら寄つて行かないか？」

夕食を一緒に食べて帰宅途中に彼は言った。どうしようかと答えあぐねていると、無理はしないで・・・と小さな声で続けられた。

「紅茶・・・ご馳走になろうかな・・・？」

この先の覚悟はまだない、でも離れがたい・・・。

そんな気持ちがあぐるぐると私の頭の中を駆け巡り、私の口からでたのはこの台詞だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9803z/>

斜め35度右後方からその声はした。

2012年1月6日01時49分発行